

薩長の兩兵、進んで淀に迫る、林隊の組頭小原宇右衛門殘兵を率ゐて、之れを拒ぎ、刀槍を揮うて、敵中に突貫すること三回。
 薩長の兩兵、地に利の委し、或は水を渡り、或は舟を泛べて、側面より銃撃を加ふ。
 宇右衛門前夜の戦に重創を蒙り、槍に縋つて部下を指揮す、會と二丸を受けて、復た戦ふこと能はず、終に八幡村に退く。
 薩長の兩兵、直に進んで淀城を砲撃す、兵火忽ち炎々として天を衝く。

二八九 伏見鳥羽の戦争 (六)

鳥羽街道に向へるは、薩州兵及び長州整武隊なり。
 會津の上田隊及び堀隊、此街道を守る、堀隊は未だ銃戰の經驗を知らず、前夜白井隊の築ける胸壁の壘を敷きて、皆其上に臥す。
 一夢未だ覺めず、敵兵既に襲ひ來りて、砲彈銃丸、習々として其頭上を過ぐ。
 會兵蹶起して之れを防ぐ、事急にして、復た胸壁を築くの暇あらず、皆堤上に露出して戦ふ、苦戦名狀すべからず。

○白井隊握飯を喰ひつ進む

白井隊淀に在り、殷々たる砲聲を聞きて、蹶然として起つ、偶と上田隊の危急を聞きて、「左らば往きて援けん。」
 と言ひつと、各と武器を把つて出づ、朝食を喫するの暇さへあらず、皆團飯を攫んで、食ひ／＼馳す。
 馳せて前夜の位地に到れば、敵は既に前面に在れども、我れには據るべき胸壁もあらず。衆皆樹根に隠れ、藪陰に潛み、散亂せる壘を建て掛けつと、其陰に匿れて防ぎ戦ひ、機を見て敵を衝かんとす。
 大砲は前日の戦に盡く毀損して、物の用を爲さず、麾下の兵士、纔かに一門を有したるも、戦鬪激烈なるに及んで、急に曳き歸る。
 白井隊の組頭松澤水右衛門、甲士杉浦佐伯の二人、見て大に怒り、馳せて砲門を奪ひ來り、之れを堤上に据ゑて、敵の砲撃に應ふ。
 左れども敵は全力を擧げて來り、其砲力頗る鋭し、隊長白井五郎太夫奮然として、「若し此處を破られなば、誰れに面を合はすべきぞ、唯進んで死ねや死ね。」
 と呼ばれば、組頭小池勝吉聲に應じて突出し、衆亦た之れに續いて進み戦ふ。

敵は益と銃砲を放ち、我れは主として刀槍を把つて當る、意氣敵を呑むも、武器終に敵に敵せず。

既にして勝吉敵弾に中りて斃れ、分隊長海老名郡治も亦た傷つく。

敵は新銳の兵來り加はりて、其砲撃益と烈しく、會兵動もすれば潰走せんとす、五郎太夫怒氣満々、

「恥を思ひ、君恩を思ふものは、此處に死ねや。」

と叱咤すれば、衆復た奮然として戦ひ、彈丸雨飛の間を冒して、敵陣に突貫せんとす。

會と一丸飛び來つて、五郎太夫の肩に中れども、更に事ともせず、益と奮うて衆を勵ます。

○白井五郎太夫の戦死

既にして一丸又飛び來りて、左肩より右肩に貫ぬく、左しもの猛士も、急所の痛手に堪へ得ず、忽ち挫と其場に斃る。

士卒之れを見て、戦志俄かに挫く、尋で杉浦佐伯も傷つき、他の戦士も亦た多く傷つく、顧みて後方を見れば、炎々たる猛火、淀の城下に起る、

「扱は伏見街道は早敗れたるぞ。」

と思へば、今は退却の外あるべからず、偶々大垣兵一分隊の來り援くるあり、組頭松澤水右衛門、目付遠山寅次郎等、此間に隊長以下の遺骸を收めて、後送せしむ。

既にして大垣兵亦た敗る、是に於て殘兵を収めて、且つ戦ひ、且つ退く、淀の大橋に到れば、諸手の敗兵續々來る、乃ち退きて橋本村を保つ。

五日の戦、幕軍終に悉く敗る。

二九〇 八幡橋本の戦争

今や幕軍の形勢、頗る非にして、携貳の徒、皆戈を逆まにして、幕軍に抗せんとす、淀藩然り、津藩亦た然り。

初め五日の戦、敗るよや、幕軍淀城に入りて、敵に當らんとす、城兵既に款を薩長に通じて、之れに應ぜず、幕軍其挾撃せられんことを恐れ、退きて八幡、橋本の兩地を保つ。

六日の黎明、林隊の甲士松田昌次郎淀に到りて敵狀を偵察すれば、皆數日の戦鬪に加はりて、頗る疲憊の狀あり、昌次郎

「此機を失せずして逆襲すれば、大勝を獲んこと疑なし。」
と思惟し、馳せ歸りて之れを謀る、議未だ決せず、薩長の兩兵、早や既に淀兵を先鋒として、來りて八幡に迫る。

會津の町田傳八幕軍の先鋒たり、秋山下總守の歩兵及び大垣兵と與に、大に邀へ戦ひ、交戦午の刻に及んで、勝敗尙ほ未だ決せず。

未の刻に至れば、彈丸既に悉く、左れども固く陣地を守りて退かず、會津の浮洲七郎刀を抜きて、大地に仰臥し、朗々漢詩を高吟しつと、敵の來るを待つ、衆以て快とす。

○津兵戈を倒まにして幕軍を撃つ

津藩の兵、幕軍の爲めに山崎の砲臺を守る、此時、不意に橋本に向つて砲撃を加ふ。桑名の兵、橋本に在り、之れを見て叱咤しつと、直に砲門を開きて應戦し、淀川を隔てて相撃つ。

八幡の幕軍、大に驚けども、尙ほ一步も退かず、偶と使者の來りて引揚を命ずるに及んで、始めて退く。

薩長の兵、更に進んで橋本の背部に迫り、津兵亦た益と榴彈を飛ばして、幕兵を撃つ。幕兵前後に敵を受けて、支ふべからず、終に退きて守口を保つ。

慶喜時に大阪城に在り、前發隊の消息を待つて、上京せんとなす、偶と鳥羽に、伏見に、戦闘あり、其形勢の頗る不利なるを聞きて、海路東歸の心あり、此日、終に意を決し、密に松平 大隅守を召して、

「汝、是れより八軒屋に到りて、通船の用意をなすべし。」

と命ず、大隅守直に城門を出づれば、引き違へに會津藩士神保修理、伏見の戦争を視察して歸り來り、容保に謁して、具に其實況を報じ、且つ

「前將軍の政權を奉還し、軍職を拜辭し玉へるもの、一に天地の公道に従ひ、勤王の至誠に基づく、然るに今や實權なく、責任なくして、大兵を擁し、清側を計らるること、其名分正しからず、其理據純ならざるを奈何せん、是れ斷じて前將軍當初の精神に反す。」

と述べて、謹慎命を待つて得策なるを苦諫す、左れども城中の士氣大に激昂し、何れも進撃を絶叫して、之れを容れず、亂噪の狀狂人の如し。
修理直に慶喜の面前に出で、大に順逆を説き、利害を論じて、直諫する所あり、慶喜亦た敗報連りに到るを見て、大に驚き、

○會津藩士神保修理謹
慎を説く

「藤堂の如き、稻葉の如きは、皆當家に重恩あり、特に今回の擧を贊助しながら、其反覆此の如し、是れ或は錦旗を見たるに由るならんも、人心の恃むべからざること、亦た以て見るべきなり、抑々今回戦端を開けるもの、彼れに在りて、我れに在らず、内に顧みて疚しからずと雖も、爾かも天朝尊奉の素志に背くを奈何にせん。」と告げて、益々去意を決し、直に大目付を馳せ、令を諸軍に傳へて、大阪城に退かしむ。

二九一 慶喜の東歸

慶喜今は愈々東歸に決す、左れども敢て衆に告げず。

六日の夜亥の刻、松平肥後守容保、松平越中守定敬、酒井雅樂頭忠績、板倉伊賀守勝靜、外國奉行山口駿河守、目付榎本對馬守、醫師戸塚文海、外國奉行支配組頭高島五郎の八人のみを隨へて、密に大阪城を出で、八軒屋より苦船に乗じて、大川を下り、天保山沖より幕府の軍艦開陽丸に乗り移らんとす。開陽丸時に不二山、蟠龍、翔鶴の三艦と共に、神崎附近の長兵を撃たんと欲し、來りて西の宮の海岸に在り。

○慶喜夜に乗じて軍艦に投ず

會々夜色昏黒にして、寒威特に凜冽たり、朔風水面を撲つて、波浪舷側を拍つ、船の操縦意の如くならず。兎角して天保山沖に出づ、英國軍艦あり、米國軍艦あれども、目指す開陽丸は其所在分明ならず。

時に米國のガンボート最も岸に近づきて泊す、乃ち之れに漕ぎ寄せて、開陽丸の所在を問ふ。

艦員其状況を見て、難船なりと察し、曳きて本艦に送る、艦長艦内に扶け入れて、仔細を問ひ、其前將軍なるを知りて、大に驚き、急に其艦室を掃うて、之れを請す。

七日の拂曉、駿河守ガンボートに乗じて、開陽丸に到り、刺を通じて、面會を求む、時に軍艦奉行矢田堀讚岐守鴻、船將榎本和泉守武揚の二人は、上陸して在らず、唯副長澤太郎左衛門のみ在り、直に面會して、來由を問へば、駿河守

「米國軍艦に高貴の御方々八人あり、速かに當艦に迎へられたし。」と請ふ、太郎左衛門、乃ち上原七郎と與に海兵十二人を率る、端艇三隻を卸して、米國軍艦に到る。

太郎左衛門導かれて艦長室に到り、慶喜及び容保等の居るを見て、ハツと驚き、

「這はく、如何にして此處には在はし玉ふぞ。」

と怪み問へば、榎本對馬守

「先づく轉乘して、後ちに語らん、疾く御供せられよ。」

と告ぐ、太郎左衛門乃ち最も大なる端艇に、慶喜、容保、定敬を請じて、自から之れを

守り、次の一隻に、忠績、勝靜其他を乗せて、上原七郎之れを守り、他の一隻には、海

兵を乗せて、後より従ふ。

既にして開陽丸に近づく、其左舷に接着せる千石積の和船あり、甲板亦た何となく物

騒がし、太郎左衛門艦上を仰ぎ見つと、

「何事なるぞ、何事の起りたるぞ、和船は何處より來れるものぞ。」

と問へば、香山道太郎船門に在り、

「船中何の異状もははず、和船は御側用人室賀伊豫守殿以下の役人方を載せて参りたる

ものにては。」

と答ふ、太郎左衛門意を安んじて、慶喜以下を本艦に移さんとす。

時に西風愈々強く、波浪愈々高し、端艇揺れに揺れて、殆ど轉覆せんとするもの屢次。

本艦急に綱を投げ卸して、之れを助け、右舷の階子を降して、無事に慶喜以下を乗り移

らしむ。

太郎左衛門其室を掃ひて、慶喜を請じ、士官等亦た己れの室を明けて、容保、定敬以下

を入る。

既にして一隻の艦艇、忽然として兵庫の方より現はれ、波濤を蹴つて、此方に突進し來

る、是れ抑も何國の軍艦ぞ。

二九二 慶喜の東歸 (下)

今しも馳せ來れるは、英國軍艦なり、開陽、不二山の中間に投錨すると齊しく、戦争操

練を開始し、二三の士官、甲板上に立ちつと、望遠鏡を手にして、我が艦状を窺ふ。

天保山沖の英艦亦た馳せ來り、不二山の舷側を掠めて、開陽丸の艦後に泊し、互に信號

を通じて、操練を行ふ、其狀我れに開戦を促すものと如し。

須臾にして英艦各々拔錨し、開陽丸を一周しつと、實彈射撃を行ふ、其亡狀言ふべから

○英國軍艦の示威

慶喜乃ち太郎左衛門に命じて、戦争操練を演習せしめ、容保以下を随へて之れを觀覽し終りて其技の熟練を賞す。

八日朝、勝靜、太郎左衛門を召して、慶喜の命を傳へ、

「上様、早々江戸へ御歸城あらせ玉はんとす、速かに開帆の用意を整ふべし。」

と命ず、士官等聞きて大に驚き、

「本艦若し攝海を去らば、大阪の警備薄弱となり、爲めに薩長の手に落ちんこと疑ふべからず、是れ由々しき一大事なり。」

と説きて、之れに反對す、太郎左衛門復た勝靜に面會して、

「本艦は當時總司令艦たり、今此艦にして攝海を去らば、戦機に臨みて、統一する所なし、特に軍艦奉行、船將俱に上陸中なり、其歸艦を待つて、拔錨の命を奉ぜん、暫時御猶豫あるべし。」

と請ふ、勝靜

「既に上意ある上は、今更中止すべからず、總司令の本艦を不二山に移さば、軍令不統

一の虞もなからん、但し讃岐守、和泉守を缺かば、航海すること能はざるか。」

と問ふ、太郎左衛門

「決して然らず、假令外國に航するとも、何の妨げあるべからず、唯兩人の中一人の歸艦するを待つて、拔錨するを便とするのみ。」

と答ふれば、勝靜入つて旨を慶喜に請ふ。

太郎左衛門亦た鳥山三郎に命じて、船將を迎へしめんとす、左れども逆風益々強くして、端艇を出だすこと能はず。

勝靜命じて不二山の艦長望月大象を招き、慶喜の意を承けて、

「望月大象儀は、唯今より不二山を以て指揮艦と心得、他の軍艦へ司令すべし。」

と命じ、更に太郎左衛門に對して、
「澤太郎左衛門儀は、開陽丸江戸城へ航海中、船將代理申付く、直に出帆の用意致すべし。」

と命ずれば、太郎左衛門今は之れに違ふこと能はず、士官を招きて、
「船將歸艦せば、或は攝海を去らざる策もあらんに。」

東 ○開陽艦の

と語れば、士官も亦た失望し、
「此上は事を構へて、船將を待つに若かず。」
と説く、太郎左衛門之れに従ひ、水兵頭古川庄八に内意を含めて、徐々に運轉せしむ。
既にして堺濱に失火あり、人々皆甲板に出で、望見す、勝靜未だ天保山沖を離れざるを
見て、速かに歸航せんことを促がす。
太郎左衛門今は止むべからず、終に意を決して航走し去る。

二九三 軍艦の東歸

開陽艦長榎本和泉守武揚は、伏見の戦況を聞き、且つ海軍の戦略を告げて、海陸共同の
動作に出でんと欲し、六日の夜、尾形幸五郎、伊藤鐵五郎、雜賀孫六等を隨へて、大阪
に到る。
武揚幕軍の敗報を聞きて、大に憤慨し、陸軍總督の本陣を訪うて、密議する所あり、七
日の早天、大阪城に登れば、守兵各々其位地を離れて驚擾し、復た規率もなく、節制も
あらず。

○榎本武揚
の慨嘆

武揚見て怪みつと、進んで御用部屋に入れば、若年寄平山圖書頭敬忠、永井玄蕃頭尙志、
淺野美作守氏祐の鼎座して、密議を凝せるあり、武揚其光景の常ならざるを見て、故
を問ふ、敬忠、
「容易ならざる一大事こそ起りつれ、上様を始め奉つり、肥後守、越中守、閣老等、昨
夜深更、密に當城を出で、軍艦に赴かれはぞ。」
と語れば、武揚慨然として、
「咄々、徳川家の運命も、今を限りぞ。」
と言ひつと、思はず悲憤の血涙を灑ぐこと數行。
頓て慶喜の室に入りて、重要な書類及び什器、刀劍を集めて、軍艦に送り、其儘城を出
で、歸らんとす、會々勘定奉行小野友五郎に行き逢ふ、友五郎
「金藏に古金十八萬兩あれども、其運送に困却せり、之れを持ち歸るの工風なきか。」
と問へば、武揚
「雜作もなきことなり、我れ之れを送らん。」
と答へ、雜賀孫六に命じて、荷車五輛及び人夫若干を雇ひ、之れを積みて八軒屋に送る。

官の金よりも、我が命こそ大切なれ、人夫等今にも戦争の起らんことを恐れて、皆途より逃げ去らんとす。
幸五郎、孫六等刀を抜きて、厳しく監督し、八軒屋より三十石船に載せて、不二山艦に送る。

武揚及び軍艦奉行矢田堀讃岐守鴻等亦た尋で軍艦に歸り、早々錨を抜きて、江戸灣に向ふ。

會津の諸臣は皆城中に在り、慶喜等の東歸を聞き、愕然たらざるはなし、神保修理は慶喜の謹慎を促がせしと雖も、其東歸を可とせず、田中土佐に向ひて、

「今度の御東歸は、其時機にあらず、却て後日の害を深からしむるの虞あり、急に馳せて止め奉つらん。」

と謀れば、土佐亦た之れを賛す、修理乃ち單騎馳せに馳せて、兵庫に到れば、開陽丸の既に拔錨したる跡なり、修理直に其跡を追うて、陸路東海道を馳せ下る。

城中既に首領なし、若年寄以下皆思ひくく散じ去る。
斯かる折柄二人の密使、忽然として京都より馳せ來る、これ抑も何者なるぞ。

二九四 容堂の密使

今しも大阪城に馳せ來れるは、土州藩士坂井藤藏、野崎紘の二人、其主容堂の密旨を啣んで、奈良路より迂回し來りしなり。

幕府の有司は、殆ど退去して、俱に議すべきものなし、乃ち轉じて會津の公用人を訪ひ、

「今や薩人朝權を弄して、兵端を開きたりと雖も、洛中空虚にして、何の兵備とてもあらず、速かに一方を破りて、入京せらるべし、容堂内に在りて斡旋せん。」

との意を告ぐ、會津の公用人、
「これ奇策なりと雖も、如何せん半日を後れたることを。」

と答へて、前夜、慶喜以下の密に出城せしことを語れば、二使其輕舉に驚き、復た事の成すべからざるを見て、悵然として去る。

抑も京都に於て薩長の専ら朝權を弄せることは、曾だ容堂一人のみならず、宇和島の老侯伊達伊豫守宗城も、安藝の世子淺野紀伊守茂勳も、亦た皆之を不快とせざるはなし、左れば宗城は四日、先づ抗議の書面を呈し、容堂、茂勳の二人も亦た聞きて之を賛す、

容堂の密使

○容堂の密使大阪に來る

○伊達宗城の抗議

此日、容堂は征討總督仁和寺宮より軍事副將を命ぜられ、宗城、茂勳の二人は參謀を命ぜられしも、皆辭して拜せず。

此兵馬倥傯の際に當り、容堂、宗城の二人は、三條邸の東御殿に退き、俱に爐を圍んで酒を酌みつゝあり、薩州藩士大久保市藏之れを探知して來り謁す、容堂

「大久保何うぢや、戦争は。」

と問ふ、市藏

「幕兵は意外に猖獗にぬ。」

と答ふれば、容堂

「ソレ見ろ、乃公は知らんぞ。」

と言ひつゝ、呵々として笑ふ、薩州藩士中村半次郎、長州藩士山田市之允の二人聞きて切齒し、

「黒谷と與に大佛をも砲撃せん。」

と意氣捲く、黒谷は會津藩邸の在るところにして、大佛は土州藩邸の在るところ。兩者の關係此の如し、左ればこそ容堂も密使を下すに至れるなれ。

○中村半次郎とは桐野利秋の事

左れども、岩倉前中將具視の親しく容堂を訪うて、懇説するに及び、遂に朝廷の爲めに盡すに至る。

二九五 會津兵の歸國

伏見、鳥羽の幕兵續々大阪城に歸り來れば、前將軍も在らず、有司も亦た在らず。

葵章の附きたる刀懸、帳臺の類は、庭中に散亂し、厩舎には馬はあれども、馬丁は在らず。

諸兵皆愾然として退散すれば、會津兵亦た城守の益なきを知り、八日、城を出で、歸途に就く。

路を紀州に取れるもあり、大島に取れるもあり、或は的矢、鳥羽に取れるもありて、海路各と東に歸る、和船に乗るものは、東海道上陸し、飛脚船に乗るものは、横濱に上陸す。

重傷者は戸板に載せて、八軒屋に送り、更に舟に乗せて、天保山に送る。天保山には佛國軍艦の士官あり、何れも能く邦語を操つる、伏見、鳥羽に於ける會津兵

の勇戦を激賞し、蜜柑を送りて之れを慰め、軍醫を招きて、夫々治療を加へ、士官以下十四五人、各々之れを手傳ふ。既にして迅動丸來り迎ふ、佛人川船にて運送するの困難なるを察し、其乘り來れる小艇を以て、乗せては運び、乗せては運ぶこと數回、終に全員を運び盡す。夫の英國軍艦の特に示威を行ひしに比すれば、眞に天淵の差、霄壤の別あり、會津兵深く好意を謝して去る。

二九六 慶喜の追討

幕軍盡く敗れ走りて、朝廷の意氣頓に昂がる。正月七日申の刻、議定、參與及び在京の諸侯を召して、慶喜の處分を議せんとす。期に至れば、有栖川總裁宮以下悉く參朝す、獨り松平大藏大輔慶永のみは所勞と稱し、代理として家老本多修理を遣はす。會議は小御所に於て開かる、有栖川宮先づ慶喜追討の大號令を讀み上げ給ふ、即ち左の如し、

「徳川慶喜天下の形勢止を得ざるを察し、大政返上、將軍職辭退相願に付、朝廷の上、斷然聞食されぬ處、只大政返上と申すのみにて、朝廷に於て土地人民御保ち遊ばされずしては、御聖業立てさせられ難くに付、尾越二藩を以て、其實効御訊問遊ばされぬ節、慶喜に於ては畏入り奉りぬへ共、麾下並に會桑の者共承服仕らず、萬一暴舉仕る可くやも計り難きに付、只管鎮定に盡力仕り居る旨、尾越より言上に及びび間、朝廷には慶喜眞に恭順を盡しぬ様思食され、既往の罪問はせられず、寛大の御處置仰付けらるべきの處、豈圖らんや、大阪城へ引取りぬは、素よりの詐謀にて、去る三日、麾下の者を引率し、剩へ前に御暇遣はされぬ會桑を先鋒とし、闕下を犯し奉りぬ勢、現在彼より兵端を開きぬ上は、慶喜反狀明白、始終朝廷を欺き奉りぬ段、大逆無道、最早朝廷に於て御宥恕の道も絶え果て、止を得させられず、追討仰付けられぬ、兵端已に相開きぬ上は、速に賊徒御平治、萬民塗炭の苦を救はせられ度く叡慮に間、今般仁和寺宮征討將軍に任せられぬに付ては、是迄偷安怠惰に打過ぎ、或は兩端を抱きぬ者は勿論、假令賊徒に隨ひし譜代臣下の者たりとも、悔悟憤發、國家の爲めに忠を盡しぬ志之ある輩は、寛大の思食にて、御採用あらせられぬ、戦功に依

りて、此行末徳川家の儀に付、歎願の儀もいへば、其筋により御許容之あるべくは、然るに此御時節に至り、大義を辨へず、賊徒と謀を通じ、或は潛居致す者は、朝敵同様、嚴刑に處せらる可くは間、心得違無之様致す可き事。

但征討將軍を置かれは上は、即時前件號令發せらる可きは勿論にいへ共、猶旗下粗暴の徒、壅蔽爰に至りし事哉と、彼是深重の思召を以て、御遅延の處、三日より今七日に至り、阪兵日々敗走すと雖も、益々出兵、吳々も止を得させられず、斷然本文の通仰出されは、各藩陪臣吏卒に至る迄、方向を定め、天下の爲め奉公之ある可き事。」

續いて岩倉前中將具視屹と一同に向ひて、

「今や朝廷此大號令を發し給ふ、歸國せんと欲するものは歸國せよ、下阪せんと欲するものは下阪せよ、一意勤王の爲めに盡さんと欲するものは、亦た之れを盡せよ、去就其意に任せ、進退其望みに由る、朝廷敢て強ひさせ給はず、宜しく意見を決し、方向を定めて、明日辰の刻までに奉答あるべし。」
と告げ、更に有栖川宮に向ひて、

「我等朝廷の御爲めに慶喜の改心反正を計りたりと雖も、終に何の効もなくして、今日に至れること、誠に恐懼に堪へず。」

と陳謝すれば、久我中納言通久

「これ皆上は宸襟を安んじ奉り、下は蒼生を救はんとするの至情に出づるもの、事成らざるは天のみ、敢て顧念せらるゝに及ばず、唯今後は此御號令を奉じて、俱に盡力するの外なし。」

と告ぐ、山内容堂は既に具視に説かれて、其意見を變ず、今は大勢既に定まりて、何の異議もあらず。

慶喜追討の令既に決す、越えて十日、愈々慶喜、容保、定敬、勝靜以下二十七人の官位を削り、且つ追討を命じ給ふ。

二九七 大阪城の焼失

慶喜の六日の夜半を以て東歸するや、其翌七日朝、幕府の目付妻木多宮、大阪城に詰め居る越前藩士岡本晋太郎を招きて、

「前將軍の昨夜御退城の際、尾越兩侯へ御託しの御奏聞書並に御書あり、急ぎ携へ歸りて、兩侯へ差上げられたく、尙ほ此御城をも受取られたし。」
と告ぐ、晋太郎

「重き御奏聞書を、我等しきのものにて拜受せんこと恐れ多し、特に御城受取の如き、尙更御請けに及ばんやうもははず。」
と答へて、承引せず、多宮重ねて

「御奏聞書は是非とも持參致さるべく、且つ御城の儀は、早々請取人を差出さるゝやう計はるべし、若し薩長の兵來り迫らば、火を掛けて、城も町家も焼き拂ふの外なし、斯くては諸民の難儀なれば、其處を思召されて、御開城とも相成りしなり、歸京の途中、薩長の陣所に立ち寄りて、能くく止戦を儀を申談じあるべし。」

と談ずれば、晋太郎之れを諾して、直に歸京の途に就く、橋本驛を過ぐる時、長州の陣所に到りて、妻木多宮の傳言を述べれば、隊長
「淀に仁和寺宮の御本陣あり、其れへ參りて、言上あるべし。」
と答ふ、晋太郎乃ち此處を去りて、淀に到り、宮の本營に出で、參謀伊知地正治に面

○慶喜大阪城を辭する
主旨

會し、具に多宮の傳言を陳ぶれば、正治

「如何にも御尤もなり、宮へ相伺ひて、兎も角も相計ふべし。」
と答へて、懇に之れを勞す、八日の午後、晋太郎京都に歸りて、慶喜の奏聞書を慶永に呈す、慶永之れを見れば、

「此度上京先供、途中偶然の行違より、近畿騒然に及びぬ段、已を得ざる場合にて、素より天朝に對し奉りて、他心なき段は、豫て御諒知の通に、然し聊たりとも宸襟を惱ましぬ段、恐入ぬ儀に付、浪華城は尾張大納言、松平大藏大輔へ相託し、謹で東退仕、以上。」

とあり、慶永乃ち尾張前大納言慶勝に送りて、其意見を聞き、更に之れを朝廷に呈す、其翌九日、朝廷より、

「慶喜東歸に付、言上の趣、聞召されぬ、將軍宮御進軍華城を以て、本陣と爲すべく仰出されぬ間、兩藩共に迅速下阪、城中點檢、迎へ奉るべき旨御沙汰事。」
との命あり、依つて尾張よりは家老渡邊對馬守外三人、越前よりは家老酒井與三左衛門外二人を大阪城に差し遣はす。

○大阪城の焼亡

諸使馳せて大阪城に到れば、樓櫓盡く滅して、烏有となり、唯餘燼のみ尙ほ在り。諸使驚きて故を問へば、九日の朝、大手門前の小屋より突然火を發して、全城に燃え移りしなり、蓋し此處に埋設せる地雷火の爆發せるもの。昨の金城も、今は焦土となる、頭を回らせば、慶長には豊臣氏家を此に失ひ、慶應には徳川氏覇を此に喪ふ、觀じ來れば多少の因縁なきにあらず。

二九八 慶喜の歸城

慶喜以下を乗せたる開陽丸は、十一日の曉色を破つて、品川に着す、慶喜端舟に乗じて、一旦濱御殿に入り、更に馬に乗じて、江戸城に還る、沿道の士民、其洋装にして、從者の僅少なるを見て、誰れ一人前將軍たるを知るものなし、其城中に入るに及んで、何れも「扱は上様にて在はせしか。」と驚き騒ぎ、始めて慶喜の歸城したるを知る。城中には先將軍家茂の簾中靜寛院宮の在はすあり、先々將軍家定の簾中天璋院の在るあり、今は徳川氏存亡の決するところ、先づ以て京都以來の經過を報告せざるべからず。此日巳の刻過ぎ、慶喜先づ靜寛院宮の御殿に出で、侍女錦小路に面會し、「去る三日、我等上洛せんと存じ、先供の者共、淀、伏見に到りし折柄、薩長の勢、無法にも支へ防ぎて、圖らずも開戦に及び、事を始めたは彼れに在れども、朝廷却て慶喜叛逆の色を顯はせるやう聞召さるゝこと、我等の本意にあらず、是に由りて一先づ東歸に及び、何れ委曲は御面會の上に陳情せん、此儀取敢へず御聞きに達し置かるゝやう。」

○靜寛院宮とは和宮の御事

と告げて立ち去り、申の刻、更に天璋院の許に到り、親しく對面して、同様の旨を報ず。慶喜固より叛意あるにあらず、伏見、鳥羽の一戦は、唯薩長の兵、先づ發砲せしが故に、之れに應戦せしのみ、彼の前年長州兵の禁闕に發砲し、闖入して、亂暴狼藉せしものと固より同年の論にあらず。今は此長州さへ朝敵にあらずとして、京都に召さるゝ程なるに、況して慶喜の所業を朝敵として謹むべく、咎むべき理由安くにかある。左れども今は薩長の意見、獨り廟堂の上に行はれて、他の公卿の意見も、侯伯の所論も

○慶喜の憂懼

○慶喜退隱せんとす

其意に反するものは、皆盡く卻けて納れず。左れば今にも關東の征伐として、錦旗の東下せんこと疑ふべからず。一身の生死は固より念とする所にあらず、唯是が爲めに徳川氏の亡滅を招くに至りては、日光の神靈に對して謝すべきの辭なく、祖宗の先靈に對しても亦た辯すべきの語なし、慶喜

「此上は謹慎して恭順の意を表し、且つは隱退して一家の祀を存せんことを圖らん。」と決意し、其翌十三日、更に天璋院の許へ、

「慶喜罪を一身に負うて、退隱せんと存じ立ち、相續人の儀は靜寛院御方とも計りて、選定あるべく候。」

と申し送る、豫ては其實弟たる民部大輔昭武を、西城に入れんとするの内意ありしも、今は其志をも捨て、全然相續者の選定を大大夫人及び大夫人に委す。

越えて十九日、手書を靜寛院宮に送りて、徳川家の永續するやう、御所向の御周旋を講ふ、慶喜是れより一意恭順して、其異思なきを表せんとす。

二九九 彰義隊の編制

君辱かしめらるれば、臣死す、君若し滅ぶれば、臣たるもの當に如何にか處すべき。今は誠に徳川氏危急存亡の秋なり、其祿を食み、其恩に浴したるもの、何ぞ晏然として傍觀坐視するに忍びんや。

麾下の士は、何れも憤起せり、就中陸軍調役伴門五郎、本多敏三郎の二人は、其下僚青木平九郎、須永於兎之輔等と共に、此月十四日、一同連署の建議書を呈して、

「今日の急務は、關八州を基礎として、再舉を計るに在り、甲信の險隘を扼し、奥羽の諸州を糾合すれば、其成功を收めんこと難からず、宜しく速に兵を駿遠甲信の要地に派して、防禦の策を施し玉ふべし。」

と説き、更に閣老に對して、草莽の有志を招集し、山王の神兵を編制して、平時は市中の巡邏に充て、有事の時は一方の防禦に用ひんことを建言し、尙ほ立花出雲守種恭に對して、五事を獻策す、乃ち

第一 上様の御謹慎專一の事、但し御退隱のみにては、謹慎の實を表するに足らず、家

○本多敏三郎後ち晋と改む

臣は勿論市中一般鳴物停止の事。

第二 朝廷へ御恭順の道を盡さるゝに就ては、諸侯へ使を馳せて、俱に尊奉の力を盡し、且つ親藩をして、上京せしむる事。

第三 朝敵の汚名を雪ぐ上は、政權料土地の儀は、諸侯衆議の上相定むる事。

第四 神祖の恩澤に浴せし諸侯と與に、當敵修理大夫を追討せしめ、武門の名義を相

立てたき事。

第五 武備膨脹、士氣振作の爲めには、敗走の諸奸吏を擯斥し、賞罰を正し、誠忠の諸士を拔擢致したき事。

と言ふに在り、其目的とし、精神とする所は、一に幕敵薩州を追討せんとするに在るのみ、朝廷に對し奉つりては、寸毫も他志なく、飽までも尊奉の誠を效し、恭順の實を表せんと欲するものなること明かなり。

左れども慶喜は一意恭順の外に、他意なく、苟くも不穩がましき舉動は、固く制して許さず。

荏苒一日を送り、二日を経る間には、慶喜追討の令も傳はり、錦旗東下の報も亦た傳は

り來る。

時機は愈々迫り、形勢は愈々急なり、若し躊躇逡巡する間に、京兵來り迫らば、大事終りに去らん。

○雜司ヶ谷
若荷屋の會
合

○四谷圓應
寺の會合

門五郎、敏三郎等、今は片時も猶豫すべからず、大に同志を糾合して、朝廷に哀訴せんと欲し、直に羽檄を飛ばして、同志の雜司ヶ谷の若荷屋に來會せんことを促がし、期するに其翌十二日を以てす。

事急にして、來り會するもの僅かに十七人に過ぎず、因りて更に十七日を以て、四谷圓應寺の會合に決す。

期に至りて、來り會するもの數十人、何れも皆悲歌慷慨の士、君家の爲めには萬死尙ほ避けずと絶叫して、活氣座中に溢れんとす。

尋で十九日、再び集會を開く、天野八郎以下來り會するもの六十七人、皆血を啜つて、忠義の爲めに殉せんことを誓ふ。

左れども座中推して首領と仰ぐに足るものなし、目付支配書役澁澤成一郎は、嚮に慶喜の大政を奉還するに方り、大に親藩を糾合し、兵威を振作して、諸藩の異心を鎮壓し、

○澁澤成一郎
後ち喜作
と改む

○彰義隊の組織成る

幕府の頹勢を挽回せんと欲せし人、最も志士の間に聲望あり。伴門五郎、本多敏三郎、須永於兔之輔等意を成一郎に屬し、淺草堀田原の宅を訪うて、懇談する所あり、成一郎亦た其意氣に感じ、慨然として之れに應ず。是に於て二十三日、又淺草本願寺に會す、來り集まるもの百餘人、會を稱して尊王恭順同志會と言ひ、隊を號して彰義隊と言ふ。因りて投票を以て頭取、幹事を選ぶ、衆望の歸するところ、頭取には成一郎、副頭取には八郎、幹事には門五郎、敏三郎、於兔之輔の三人、各々其選に當る、一同更に血を刺して誓ひ、其血誓狀の初めに、

「方今社稷危急存亡の秋、臣子盡忠報國の誠を效すは、士道の常にして、諸士の仰ぐ所なり、然れども昇平三百年の久しき、士氣相弛びゆより、盡忠報國は人口に膾炙する而已、未だ其實際を見ず、故に今日の形勢に至りゆも、敢て人を恨むに詮なし、誰か之を恥ぢざらんや、然らば則ち言行相反せず、愈々身命を抛つて、君家の御窮辱を一洗し、反逆の薩賊を戮滅し、上朝廷を尊奉し、下萬民を安堵せしめ、遙に神祖の聖靈に報い奉る可く、有志の士は、斷然一死を天地神明に誓ひて、姓名を此帖に記載せ

んことを仰ぐ、吾等不敏と雖も、聊か馳驅の勞を執りて、諸君の孤忠を世に示さんもの也。

と記す、烈々たる意氣燃ゆるが如し、外に「同盟哀訴申合書」なるものを作り、慶喜の爲めに其冤罪を條陳して、闕下に哀訴せんことを誓ふ。

府内を抄掠して、金圓を強奪せしものは、薩人なり、幕府を排擠して、政權を篡奪せんとするものも、亦た薩人なり、薩人に對しては其股を裂き、其肉を啖はんと欲するの心、湧くが如しと雖も、敢て粗暴過激の舉動を事とせず、唯輪王寺宮の西上を請ひて、朝廷に哀請し奉つらんと欲し、市中を巡邏して、人心を鎮撫し、非常を警戒し、只管謹慎恭順して、恩命の下るを待つ。

三〇〇 有司の憤起

一方に於て志士の奮起すると與に、他の一方に於ては、大に有司の憤起するあり、其議論最も激越に渉る。

○小栗上野介等の主戦論

小栗上野介正順、榎本和泉守武揚、大鳥圭介等は、朝廷大軍を發して、江戸を討つに決有司の憤起

せりと聞き、皆憤然として開戦せんと意氣捲く。就中正順は勘定奉行兼陸海軍奉行として最も勢力あり、曩きに小野内膳等と與に、佛國公使フオン、ロセス及び同國宣教師カシオンを介して、佛國政府より軍艦七隻及び金貨數百萬兩を借り入れ、先づ長州を征服し、更に進んで薩州をも討伐せんと經畫せしことあり、是に於て再び

「幕府今や勢沮み、氣挫けたりと雖も、何ぞ一戰の力なからんや、止むなくんば公然佛國公使の力を藉るも亦た可なり、薩長の徒をして、府内を蹂躪せしむべからず。」と主張し、抗辯たる意氣當るべからざるものあり、勝安房守義邦は當時正順の支配に屬す、其國家百年の患害を貽す所以を論じて、之れに反對すれども、正順敢て聽かず、更に慶喜に謁して、斷然開戦せんことを慫慂す。

慶喜は夙に恭順の方針を執り、復た耳を開戦の議論に假さず、正順反覆陳説すれども、慶喜之れを納れず、其儘起つて内に入らんとす。正順突と進んで其裾を押へ、慶喜を仰ぎ見つゝ尙ほ極陳す、慶喜其無禮を怒つて、即座に其職を免す。

○上野介外援を假らんとす

○上野介の免職

正順今は奈何ともすべからず、終に其邑上州高崎に歸り、練兵一隊を養ひて、自から守る。幕政二百六十餘年間、將軍の直語其職を免ぜられたるもの、實に此正順唯一人あるのみ。正順既に黜けらる、左れども武揚、圭介等は尙ほ開戦の意見を固執して變ぜず、大阪より歸り來れる諸士、亦た之れを贊するもの多く、其勢力侮るべからざるものあり。

三〇一 江戸城の大會議

是時に當り老中板倉伊賀守勝靜、小笠原長門守長行以下、朝廷より官位を褫はるよもの或は退隱を乞ひ、或は領地に退きて、復た登營するものあらず。慶喜乃ち新たに有司を任命するの必要を感じ、正月二十三日、勝安房守義邦を陸軍總裁に、藤澤志摩守を陸軍副總裁に、矢田堀謙岐守鴻を海軍總裁に、榎本和泉守武揚を海軍副總裁に、大久保越中守忠寛を司農總裁に、成島大隅守弘を司農副總裁に、山口信濃守を外國總裁に、河津伊豆守を外國副總裁に任じて、若年寄格となし、義邦を以て其首席となす。

江戸城の大會議

○幕府最後の内閣
○成島弘柳北と號す
○勝義邦幕府の首席となる

幕府の内閣愈々成る、此夜、慶喜一同を其面前に召して、京軍に對する方針を議す、或

は

「函根の險阻を據守して、海道の京軍を防遏し、關東の諸侯を糾合して、幕府の勢力を支持し、天下を兩分して、姑く時勢の變化を窺はん。」

と論ずるものあり、或は

「一介の使者を派遣して、關東の事情を哀訴し、暫く京軍の入關を止めんに若かず。」

と説くものあり、或は

「君若し單騎西上あらせ玉はゞ、士氣爲めに大に振作し、未だ戦はずして、京軍を壓倒するに足らん。」

と言ふものあり、或は

「軍艦を派遣し、京軍の不意に出で、大阪を衝かん。」

と述ぶるものあり、或は

「大に檄を天下に飛ばして、薩長征討の兵を擧げん。」

と陳ずるものあり、紛々たる衆論、多くは開戦の方針ならざるはなし、此時、義邦少し

く膝を進めつと、

○勝義邦の
平和論

「凡そ國家の興亡は、氣數に關す、區々たる人力の得て制すべき所にあらず、此頃伏見鳥羽の役、一萬五千の幕軍を以てして、僅々數千の京軍に敗れたるもの、亦た氣數の致すところ、決して戦の罪にあらざるなり、今や既に此氣數の變移を來す、將來の事亦た推して知るべきにあらずや。」

由來關東の武士は、慷慨身を忘るゝの勇あるも、從容死に就くの義に乏し、況して謀を帷幄の中に運らして、勝を千里の外に決するの智者に至りては、其人甚だ罕れなり、今日は決して慷慨死を急ぐの時にあらず、宜しく國家の利害得失を審案熟圖すべきの秋なり。

抑と開戦を主張するものは、其意氣頗る勇壯なりと雖も、唯一時の血氣に逸りて、百年の廟算あるを知らず、知らず何の術を以て戦ひ、何の策を以て敵を破らんとするかを。

今や官軍一捷の威に乗じ、天子を挾んで、海内に號令す、馬首の向ふところ、破竹の如し、決して尋常の策を以て、支へ得べきにあらず、唯上下一死を期して、之れに當

るの外なきなり。
 今若し軍議開戦に決せば、我等自から軍艦を督して、駿河に到り、先づ我兵二三百を揚陸して、戦を挑ましめん、然れども衆寡固より敵せず、我兵忽ちにして敗れ走り、敵は勝ちに乗じて追撃し、進んで清見ヶ關近くに到らん、其時、我等軍艦より其側面を砲撃すれば、彼れは錯愕狼狽して、其度を失はんこと疑ふべからず。
 我兵其機に乗じて上陸し、吶喊して彼れの中堅を衝くときは、我軍の全勝、唯反掌の間、に在らんのみ。
 我軍此一勝を博せんか、關東の士氣は、俄然として振起せん、此機を失せず、人を派して東海沿道恩顧の諸侯を督責し、火を所在に放つて、京軍の來往を梗塞せしめ、我等は更に倔強の軍艦三隻を率ゐて、攝海に入り、海路を壅塞して、京軍と其本國との聯絡を遮斷し、以て徐かに天下の變動を窺はん。
 東山、北陸二道の京軍は、海道、京軍敗走せりと聞きて、肝膽を寒うするの際、更に中國、九州の海路、全く幕軍の爲めに遮斷せられしと聞かば、必ずや進退度を失ひて、策の出づる所を知らざるべし。

○慶喜の論

事是に至らば、我軍の勝算、敢て期しがたきにあらず。
 然れども邦内是れより分裂し、九州の諸侯は、必ずや英國に結んで、其志を達せんことを圖るに至らん、是に至りては本邦の前途、實に言ふに忍びざるものあり。
 是に由りて之れを觀れば、主公寧ろ公明正大なる大政返上の初志に復り、唯一途に恭順の意を表して、朝裁を待ち、城池も納るべく、封土も獻すべく、泰然として天下の公道を執り、徳川一家の興廢は、唯天運に任せ玉はんこそ然るべけれ。
 近日、京都の意向は、逆に取りて、順に守るの傾向あり、故に再び我れを激して、如何なる術中に陥れんも亦た知るべからず。
 左れば恭順の一事に至りても、亦た非常の耐忍を要す、決して容易の業にあらざることを覺悟せざるべからず、願はくは主公の御決心を拜承し、臣等一死を賭して、其貫徹を期しんはん。
 と論陳す、誠意辭色に溢る、今まで開戦を主張せし人々も、之れを聽きて大に啓發する所少からず、其氣焰頓に鎮まる、慶喜此形勢を看取し、一同に向ひて、
 「我れ禁闕に咫尺すること多年、朝廷に對して秋毫も疎意なしと雖も、一朝伏見鳥羽の

一舉を醸して、終に朝敵の汚名を蒙むるもの、遺憾何ぞ極まらん、然れども今に及んでは、復た之れを辯疏するに由なし、此上は百事朝裁を仰ぎて、余が従來の罪を謝すべきのみ、諸臣の是が爲めに憤激するが如き、亦た必らずしも謂はれなきにあらずと雖も、今若し一たび戦端を開きて、干戈相結んで解けざること多日に亙らば、終に金甌無缺の皇國をして、忽ち印度、支那の覆轍に陥らしめ、爲めに天下は土崩に歸して、は塗炭に苦しむに至らん、是れ余の忍びざる所なり、諸臣能く余か恭順の意萬民衷を體認して、敢て妄動すること勿れ、若し余の命を用ひずして、輕舉するものあらば、復た余の臣にあらず。」

と反覆曉諭するところあり、一座俯伏して、血涙に咽び、

「台慮誠に至當に、愚臣等の敢て異議すべきに由はず。」

と答へて、一同其席を退く、慶喜の意志、今は愈々明瞭となる、江戸有司の大勢、是れより恭順に決す。

○江戸有司の意見定まる

三〇二 佛人の忠告

勝安房守義邦既に幕府の陸軍總裁として、其全權を握る、是れより諸事其意見に依りて決す。

○佛人の勸告

佛國人シヤノワンなるものは、幕府の陸軍雇教師なり、此月二十六日、義邦を訪うて、

「貴下今回陸軍總裁に推任せられしと聞く、其麾下に屬する士卒は、余等の久しく訓練せるものにして、今や其業既に成熟す、貴下之れが總裁として戦を開かば、必勝を得んことを疑ふべからず、若し愈々開戦に決せば、余等亦た其一隊を指揮して、死力を致さんと欲す、貴下躊躇して軍機を失はるゝこと勿れ。」

と述べ、戦略の略圖を呈して、函根に據りて防戦せんには、此の如くすべく、江戸城に嬰りて防禦せんには、此の如くすべしと指示す。

義邦其厚意を謝すれども、敢て確答を與へず、シヤノワン尙ほ推して開戦の決答を聞かんことを求む、義邦

「然らば明日を以て決答せん。」

と答へて、シヤノワンを還へし、即夜、佛國公使フオン、ロセスを訪うて、具に本邦の現狀を陳べ、陸軍教師の厚意を謝して、其雇を解かんことを談じ、更にシヤノワンに面

會して、非戰の議に決せし旨を答ふれば、シヤノワン之れを怪しみ、
 「東國の諸侯は、敢て西國の諸侯に服せず、同盟して薩長の二國を討たんと謀ると言ふ
 にあらずや、貴下既に江戸の兵權を握り、日本の半國亦た其指揮に應ず、宜しく一戰
 敵を破り、更に關東に據りて、銳氣を養ひ、時機を察して、大阪を衝き、以て京都と
 海陸の通路を遮斷すべし、然らば則ち敵は策の出づる所を知らず、勢ひ我れに向うて
 和を求めざるを得ざるに至らん、貴下乃ち寬嚴其度に應じて、平生の持論を行ふこと、
 極めて易々たり、然るに貴下此良策を捨て探らず、却て至難の手段に依りて、家國
 を保たんとす、貴下に屬する士卒は、必らずや其怯懦を怒り、其優柔を憤ほり、復た
 貴下の節度に服せざるに至らん、事此に至らば、貴下の安全すら且つ保つ能はず、復
 た誰と與にか時局の平和を保たん、余は恐る余等の解雇歸國の途に上るの後、貴下の
 志業終に空しく畫餅に屬せんことを、貴下請ふ再思せよ。」
 と告ぐ、義邦其厚意を謝し、且つ
 「余は足下に對して、未だ余の意見を詳陳するの機會に達せず、唯余は千辛萬苦、諸士
 の憤怨を一身に集めて、斃れて後己まんのみ。」

○慶喜上野
 大慈院に入
 る

と答へ、互に手を握りて別る、佛人干渉の禍を防げるもの、實に義邦の力なり。
 是に於て慶喜幕府の事を擧げて、義邦に一任し、二月十一日、城中を出でて、上野東叡
 山大慈院に入り、一室に屏居して、只管謹慎を表す。

國の爲め民の爲めとて今暫し

忍ぶが岡にすみ染の袖

とは、當時慶喜の自から詠じて、其懷を述ぶるところ、人々傳唱して、皆涙を垂る。
 彰義隊は淺草の本願寺に屯す、是に至り請うて上野に移り、以て慶喜守護の任に當る。

三〇三 會桑二侯の退去

是れより先き、容保及び松平越中守定敬の二人、慶喜に従うて江戸に歸るや、容保は
 直に和田倉門内の本邸に入る。
 容保京都に在ること七年、樹竹舊の如しと雖も、時局復た昨の如くならず、胸中の感慨
 果して如何ばかりぞ。
 定敬は自邸に入らず、一橋邸及び會津邸に寓し、日夜慶喜に謁して、大計を説く、其容

會桑二侯の退去

○容保の退隱

れられざるを察して、終に築地の自邸に歸る。
 容保亦た慶喜の意を體し、謹慎の意を表して退隱を請ふ、二月四日、慶喜之れを允し、其養嗣若狹守喜徳をして家督を相續せしむ。
 十一日、慶喜の上野に退かんとするや、稻葉美濃守正邦をして容保に諭すに嘆願書を奉呈せんことを以てせしむ、容保乃ち輪王寺宮公現法親王に依りて、朝廷に呈す。
 會津の家老田中土佐、神保内藏助等も亦た嘆願書を尾州、熊本、高松、土州等二十二侯に送りて、救解を請ふ、土州は之れを辭し、他は皆答へず。
 幕府の有司亦た書を定敬に贈りて、寺院に退去せんことを諷す、桑名藩の有志等大に争へども、聽かれず、此夜、密に一書を定敬に呈して、其意中を示さんことを請ふ、定敬乃ち諸臣を書院に召し、
 「余の東下せし以來、撫恤意の如くならず、其困苦想ふに餘りあり、今や將さに香華院に退かんとす、汝等能く自愛し、時運の趨向を察して、報國の責任を全うせよ。」
 と説き示せば、諸臣皆感泣せざるはなし、定敬此夜自邸を出で、靈岸寺に入る、有志皆泣きて君冤を雪がんことを誓ふ。

○定敬の諭示

○定敬靈岸寺に入る

會津藩士は時事の非なるを見て、慷慨止むこと能はず、十三日、容保及び家老に請ひ、神保修理を三田の別邸に送りて、屠腹を迫る。
 修理は伏見鳥羽の戦敗るや、容保并に慶喜に謁して、一意謹慎せんことを苦諫し、其東歸するを聞かば、又之れを止めんと欲し、終に其跡を逐うて、江戸に歸る、會津藩士修理の居らざるを見て、大に怒り、
 「前將軍の主公及び桑名侯を要して、密に東歸せさせ玉へるもの、畢竟修理の奸言に欺かれ玉へる爲めならん、彼れは常に西國人と親し、彼れの逃亡せるもの、或は西軍に投ぜしものなるやも知るべからず、恨むらくは彼れを斬つて兩斷となさざりしことを。」
 と罵りて、切齒扼腕せざるはなし、修理は回陽丸に後るゝこと數日にして江戸に還り、勝安房守義邦等と謀りて、大に善後の策を講じ、速に時局を收拾して、内國の戦亂を避け、併せて外國の香噓を防がんことを力む。
 既にして會津藩士續々大阪より還り來り、修理の歸府せるを見て、大に激昂し、之れを斬つて甘心せんと欲す。

○神保修理の自刃

○容保定敬の二人江戸を去る

容保其害に遭はんことを察し、假りに和田倉の邸に幽す、義邦亦た之れを救はんと欲し、公命を以て修理を召す、左れども諸士の沸騰せんことを虞れ、事に託して従はず。藩士之れを聞き、速に修理を處分せんことを迫りて止まず、此日、終に修理を請うて三田に送り、藩命を以て死を賜ふ、修理従容として左右を顧みつと、
「我れ固より罪なし、然れども君命に従ふは、臣子の分のみ。」
と述べ、直に劔に伏して斃る、時に年三十、囚中一絶を賦して、義邦に贈る、一片の丹心藏めて二十八字の中に在り。

容保城池に退きて謹慎せんと欲し、此月十六日、江戸を發して、國に歸る、定敬亦た大久保越中守忠寛の慶喜の命を以て、

「府下に謹慎せらるゝこと然るべからず、宜しく僻遠の地に避けて、恭順朝裁を待たるべし。」

と告ぐるに會ふ、乃ち横濱より普國商船に乗じて、新潟に航し、柏崎の領地に退きて、後命を待つ。

三〇四 京軍の東下

○東征大總督の任命

○東軍兩道より分れ進む

朝廷既に慶喜追討に決す、是に於て總裁有栖川熾仁親王を以て、東征大總督となし、嘉彰親王を以て海軍總督となし、且つ諸軍の向ふところを定む。

薩州、長州、紀州、津、備前、佐土原、龜山、水口、大村、因州、肥後、越前の兵は、東海道より進み、薩長の別軍及び土州、大垣の兵は、東山道より進む、今は親藩も、譜代も、皆先きを争うて之れに加はる。

新撰組及び在府紀州藩士中には、飽までも幕府の爲めに、一戦せんと欲するもの多く、或は甲州に向ふものあり、或は常野の地方に走るものあり、其形勢愈々穩かならず。

勝安房守義邦府下無頼の徒の亂離に乗じて火を放ち、財を掠めんことを虞れ、急に江戸に散在せる消防夫の頭領、博徒の巨魁等三十餘人を招き、自から金を與へて、府内を警戒せんことを命ず、衆皆之を榮とし、喜んで命を奉ず。

既にして京軍の先鋒、池上本門寺に来る、義邦諜者を放つて其内情を探り、慶喜の恭順せるにも拘はらず、尙ほ江戸の攻撃を行はんとするを聞きて、應戦の必要を感じ、

「前將軍の誠意誠心、恭順を表し玉ふにも拘はらず、京軍飽までも江戸を砲撃し、徳川を族滅せんとするに於ては、復た理非を以て争ふべきにあらず、此上は江戸八百八町を焼き拂うて、快よく決戦せんのみ、成敗利鈍の如きは、固より顧みるべきにあらず。」

○八百八町
焼討の策

と決意し、再び消防夫の頭領及び博徒の巨魁等を召し集めて、
「前將軍の恐れ多くも東叡山に入りて、只管謹慎を表し玉へるもの、一つには國家の安泰を計らせ玉ひ、一つには御家の無事を圖らせ玉はんが爲めのみ、然るに薩長の諸軍、若し之れを聴かず、強て進撃せんとするに於ては、武門の習ひ、我れ亦た大に決戦せざるべからず、汝等二百餘年の恩澤を思はど、身を捨て、命を捨てよ、大に報恩の道を計らざるべからず、其れに就て一つの頼みあり、汝等各よ其子分を指揮して、府内に分れ、我れ一たび號令を下さば、四方一時に火を放つて、盡く敵軍を焼殺すべし、是れ無比の忠節なり、如何に承引すべきや。」
と告ぐれば、何れも氣を負ひ、義に勇んで、死生を念とせざる市井俠勇の面々、
「徳川家の御爲めには、我等の一命をも差上げんはん、それしきの御用に、何の否やの

○市民救助
の策

いべきや、御心安かれ、敵軍幾萬ありとも、盡く焼き殺しんはん。」
と勇み立つ、義邦
「天晴なり其志、飽までも徳川家の御爲めに盡せよかし、左れども我れの指圖せざる間は、假令如何なることありとも、決して火を放つことあるべからず、此儀は吳々も承知致し置くべし。」
と戒め、火具を渡し、方策を授けて、夫々遣り還へし、更に房總二州の漁民を召し寄せ、
「汝等江戸に火の起るを見るときは、即時に船を出だして、市民を助け去るべし。」
と命じ、自若として京軍の來り迫るを待つ。
怪風早や樓に滿つ、山雨何れの邊にや來る。

三〇五 鐵舟の蹶起

京軍の先鋒既に池上に着し、有栖川大總督宮亦た駿府に來着し給ふ、江戸の士民、聞いて心血皆湧く。

鐵舟の蹶起

○山岡鐵太郎鐵舟と號す

○輪王寺宮東征の師を止めんと有栖川宮に説かせ給ふ

幕府瓦解史下篇

麾下の士山岡鐵太郎、關口良輔等馳せて上野に到り、寛永寺の執當覺王院義觀に逢うて輪王寺宮公現法親王の慶喜の爲めに東征の師を止め給はんことを哀願し奉る。法親王其志を憐みて、之れを納れさせ給ひ、二月二十二日、岩槻藩兵を率ゐて、江戸を發足せさせ給ふ。

二十八日、函根に達し給へば、京軍の先鋒、早や既に關門を踰えて來る、法親王使を薩長の陣に遣はして、行路恙なきや否やを問はせ給へば、隊長

「大總督宮に報ぜざれば、御答致し難し、暫時御控へあるべし。」

と答ふ、法親王乃ち小田原に在りて、其回答を待たせ給ふ、頓て其答報を得て、更に小田原を發し、三月七日、駿府に達し給ひ、大總督宮に御對顔あらせて、慶喜恭順の狀を語らせ給ひ、

「今や慶喜上野大慈院に在りて、罪を待ち、沐せず、浴せず、一意恭順の外、他意なし、此上は王師を勞して、無辜を苦むるの要なからん、宜しく京師に奏して、東征を止めさせ給ふべし。」

と請はせ給ひ、覺王院義觀亦た參謀西郷吉之助、林半七に對して、反覆論辯する所あり

しも、終に聽かれず、義觀憤然として席を起つ。

法親王の哀願 既に効なく、靜寛院宮及び天璋院の兩大夫人、亦た使を遣はして、哀訴すれども、又要領を得ず、京軍の先鋒、既に來りて、六郷の附近に在り。

江戸の形勢は、愈々動搖し、負擔奔竄するもの、絡繹として相續ぐ。

幕府使者を發して、恭順の意を通せんと欲す、左れども皆京軍の迫害を恐れて、敢て往かんとするものあらず。

山岡鐵太郎は夙に劍道を以て鳴る、自から進んで京軍を止めんと欲し、先づ上野に到りて、慶喜に謁し、

「今や形勢愈々切迫仕つる、御恭順の御主旨如何、明かに臣に示させ玉ふべし。」と陳ぶれば、慶喜

「我れの誠意恭順の外、他事なきこと、豫て諭示せる所の如し、如何せん、今や既に朝敵の名を蒙る、終に天譴の誅を避くるに由なきことを、左れども一身の生死は言ふに足らず、憂ふる所は唯一家の浮沈に在り。」と告げ、泣然として涙を垂る、鐵太郎重ねて、

○山岡鐵太郎の蹶起

鐵舟の蹶起

「何とて去る女々しきことを宣ふぞ、臣は君の陽はに恭順を装うて、陰かに深謀を懐かせ給ふにあらすやと存するにては。」

と言へば、慶喜儼然として、

「否な、斷じて去ることなし。」

と告ぐ、鐵太郎

○鐵太郎枕を慶喜に獻す

「然らんには誠意の貫徹せざる道理ははず、臣必らず天聽に達せしめはん、決して御憂慮あらせ玉ふべからず。」

と述べて、一枕を獻す、其意

「君は枕を高うして安臥あらせ玉へ、臣等奔走盡力仕つるべし。」

と言ふに在り、鐵太郎直に辭し去り、幕吏に會うて之れを謀る、左れども皆危ぶみて、

敢て従はず、鐵太郎乃ち去つて勝安房守義邦を訪ふ。

此頃、鐵太郎の義邦を暗殺せんとするとの説あり、義邦刺を見て、忽ち小首を傾く、頓

て

「兎も角も逢うて見ん。」

と思ひて、直に鐵太郎を一室に通し、ツカ／＼と其前に出でよ、

「拙者が安房なり、何用ありて参られしぞ。」

と問ふ、意氣人を呑むの概あり、鐵太郎一禮もそこ／＼、

「我れ是れより大總督宮の本營に到りて、東征の師を止めんと欲す、貴意如何。」

と言ふさま、別に害心ありとも見えず、義邦は唯彼れの粗豪なる劍士なりと言ふの外、

別に知る所なし、亦た其成功を危みつゝ、先づ

「如何にして本營へ参らるよぞ。」

と問へば、鐵太郎

「我れ大總督宮の本營に到らば、唯斬るか、縛るかの外なからん、若し縛らんとせば、

甘んじて繩を受けん、又斬らんとせば、予は大總督宮に一言すべき大事あり、聞かざ

らんと思はゞ、速かに斬れ、聞かんと思はゞ、予の言上したる後に於て斬れと申すべ

し、西軍暴なりとも、妄に人を殺すものにはあらず、何の危むことかあらん。」

と答ふ、其辭壯にして、其色亦た決す、義邦其用のべきを知り、

「好し、然らば大總督宮の本營に到りて、主公の御爲めに盡せ、我れ亦た託すべきもの

○鐵太郎駿府に向ふ

あり。」

と告げ、參謀西郷吉之助に贈るの書を裁して、鐵太郎に附し、舊臘、薩州邸襲撃の時に生擒せし益満休之助を縦して、同行せしむ。

鐵太郎直に江戸を發し品川、大森を経て、六郷川を渡れば、京軍の先鋒、來つて此處に在り、銃卒道路を挾んで列す、鐵太郎平然として其中を濶歩し、隊長の營所に到りて、

「朝敵徳川慶喜の家臣山岡鐵太郎と申すもの、大總督府に參らん爲め罷り通る。」

と大呼すれば、衛卒唯驚視するのみにして、敢て咎めず、更に進んで神奈川に到れば、

長州兵此處を守る、休之助前に立ち、

「我は薩州藩士益満休之助なり。」

と告げて過ぎ、鐵太郎亦た其跡に續いて、難なく過ぐ。

此れより晝夜兼行して、九日、駿府に達し、直に西郷吉之助の宿所に到りて、面會を求む。

吉之助は天性簡樸の人、早速鐵太郎を延見して、

「拙者が吉之助なり、御用の筋は。」

○鐵太郎西郷吉之助を訪ふ

と簡單に問ふ、鐵太郎も亦た粗野の性と

「今回御征討の御趣意は、是非を問はず、利害を顧みず、唯何でも角でも進撃せらるゝ御主意なるか、我が徳川氏固より多数の臣下あり、假令慶喜は恭順を守り、謹慎を表して、只管無事を計るとも、若し朝廷の御趣意、一に進撃に在りと聞かば、是等の臣下、或は反抗し、或は脱走するものあるに至らん、斯くては慶喜の至誠も、或は朝廷に達せざらんことを思ひ、其精神を大總督府に上聞せん爲めに參りしなり。」

と飾らず、偽はらず、唯思ふ所を有りの儘に述ふ、吉之助「なれども既に兵を甲斐に集むるとも申さずや、先生の言とは大分の違ひなり。」

と言ひつゝ、ギロリと見遣る、鐵太郎言下に、

「其は脱兵の所爲のみ、慶喜の存する所にあらず。」

と言へば、吉之助黙然として、一語をも發せず、鐵太郎重ねて、

「戦を好み、人を殺すものは、王師と稱すべからず、天子は民の父母なり、宜しく仁義の心を存して、生靈の苦を憐れまるべし、然らばんば決して王師とは申させまじ。」

と突つ込む、吉之助

○鐵太郎吉之助を詰る

鐵舟の蹶起

「官軍固より進撃を好むものにあらず、恭順の實だに表せられなば、勿論寛大の處置あらん。」

と答へて、其本意を漏らす、鐵太郎

「實効とは如何なることにほぞ、慶喜は決して朝命に背くものにはあらず。」

と言へば、吉之助

「過日、靜寛院宮及び天璋院殿の使者來りて哀訴せしも、徒に畏怖するのみにして、條理明白ならず、今先生の來訪に接して、江戸の近狀を知るを得たるは、重疊なり、暫時待たれへ、大總督宮に言上して、返答すべし。」

と告げて、早々出で去る、稍ありて歸り來り、

「唯今大總督宮の懿旨を伺ひしに、慶喜此條件に従はゞ、進撃を止めんと仰せなり。」と告げて、五ヶ條の諭旨を示す、鐵太郎取つて之れを見れば、

○五ヶ條の諭旨

- 一、城を明渡す事。
- 一、城中の人数を向島へ移す事。
- 一、兵器を渡す事。

一、軍艦を渡す事。

一、徳川慶喜を備前へ預くる事。

とあり、鐵太郎頓て屹と首を擧げ、

「御達の趣は、承知致せり、左れども此内の一ヶ條のみは、遵奉すること能はず。」

と言へば、吉之助

「何の箇條なりや。」

と問ふ、鐵太郎

「最後の箇條なり、主人慶喜を備前に預くるに於ては、徳川の家臣は、決して承服せず、結局兵端を開きて、數萬の人命を斷つに至らん、是れ王師の取るべき御處置とも存ぜず。」

と答ふれば、吉之助儼然として

「是れ朝命にほぞ。」

と告ぐ、鐵太郎亦た決然として、

「假令朝命なりとも、此箇條には服しがたし。」

○鐵太郎の硬論吉之助を屈す

と言ひ放てば、吉之助

「此箇條に服されずんば、決して恭順の實を表するものとは申されまじきぞ。」

と説きて、其承諾を促がすこと再三、鐵太郎色を正しつと、

「今姑く先生と地を易へて申さんに、先生の主君修理大夫殿、誤まつて朝敵の名を受け

て、官軍の征討を被らるゝ時、先生其恭順謹慎、他意なきを告げて、無事を計らる

るとせよ、朝廷若し修理大夫殿を他へ預くべしと命ぜられなば、甘んじて之れに従

ひ、恬然として其他に移らるゝを傍觀せらるゝか、君臣の情誼は、決して斯かるもの

にはははざらん。」

と辯ずれば、吉之助黙然として沈思すること暫し、頓て巨眼を開きつと、

「先生の一言、如何にも然り、慶喜公の事は、吉之助誓うて保護せん、先生苦慮せらる

ること勿れ。」

と告げ、更に

「先生、官軍の陣營を犯し來る、軍法に於ては捕縛すべき所なるが。」

と言へば、鐵太郎領つきつと、

○吉之助鐵太郎を饗す

「拙者も固より其覺悟なり、先生に對して卑見を訴へし上は、寸毫も遺憾なし、早々繩を打ち玉へ。」

と答へて、自若たり、吉之助口を開きて、カラ／＼と笑ひ、

「先づ一杯參らるべし。」

と語り、酒肴を出だして、款待す、鐵太郎敢て辭せず、連りに數獻を傾むく、頓て辭し

去るに臨み、吉之助特に陣營通行の手形を與ふ。

鐵太郎又休之助と與に歸府の途に就く、品川に達して、番兵の爲めに誰何せられしも、

答へずして過ぐ、番兵怒つて銃を放てども、幸ひに發せず。

休之助驚きて馬より飛び下りさま、銃を叩き落し、西郷參謀の手形を示して、漸く無事

に此處を打ち過ぐ。

鐵太郎江戸に歸りて、狀を義邦及び大久保越中守忠寬に報すれば、二人大に悦ぶ、慶喜

亦た聞きて、始めて其誠意の達したるを喜ぶ。

三〇六 薩邸の談判

京軍の江戸進撃の期は、三月十五日に在り、砲火一たび開かば、八百八街悉く焦土と化せん。

大總督府參謀西郷吉之助既に山岡鐵太郎に約する所あり、乃ち單騎駿府を發して、江戸に馳せ向ふ、和戦の關鍵、收めて其握中に在り。

十三日、先鋒隊の本營なる池上本門寺に到りて、何事をか打合せ、其儘進んで高輪の薩州邸に入る。

勝安房守義邦は吉之助と舊識あり、其參謀として來るを聞くより、

「彼れにして來らば、安心なり、決して無法の事を爲すものにはあらず。」

と思惟し、他人の皆仲々として憂ふるが中に、義邦獨り駒々として眠る、人皆其香氣に驚く。

既にして吉之助の薩州邸に入りしと聞くより、義邦直に一書を贈りて、今日は決して兄弟鬩牆の時に在らざるを論じ、且つ軍門に臨んで一言せんことを求む、吉之助之に應じて、

「我れも亦た面談せんと欲す、田町の弊藩邸に臨まれるれば幸なり。」

判 ○ 兩雄の談

との旨を答ふ、義邦乃ち單騎馬を馳せて薩州邸を訪へば、吉之助快よく諾して、一室に延く。

稍ありて吉之助一僕を従へて、庭の方より入り來る、身には古洋服を着して、足には引切り下駄を穿つ、

「これはく甚だ遅刻致して失禮仕りぬ。」

と言ひつゝ、座に着きて、丁寧に禮を施し、

「流石の先生も、此度は定めて御困りに比はん。」

と言へば、義邦

「拙者の身になつて見ざれば、所詮御分かりには相成まじ。」

と答へて莞爾たり、義邦胸中萬斛の所蘊ありと雖も、此日は別に吐露せず、唯京都より

「和宮は餘儀なき御事情ありて、關東へ御降嫁ありしに、圖らずも今回の事起りて、宸襟甚だ安からず、宜しく忠誠を勵みて、宮の御身の上を保護し奉るべし。」

との御内命ありしことを告げ、

「此事は定めて御承知ならん、拙者既に御引受け申せし上は、飽までも保護し奉つらん

こと勿論なり、皇女御一人を人質に取るが如き卑屈陋劣の心は、微塵も存せず、此儀は安堵せらるべし、此他の事は、明日重ねて來りて、緩々談判せん、篤と勘考し置かるべし。」

と語り、我れより熟考の餘地を與へて、其儘引取る。

京軍進撃の期は、愈々中一日を隔てたる明後日なり、危機は既に迫りて、眼前に在り、風雲時々刻々より險惡を加へ來る。

十四日、義邦重ねて薩州邸を訪ふ、京軍の三々五々として徘徊せるもの、何れも皆

「江戸屠るべし、慶喜斬るべし。」

と高吟して、傍ら人なきが如し、誰れか四面楚歌の感なからん。

薩州邸に於ては、今や吉之助と義邦と相對して坐す。

天下の治亂も、之れに繋がり、江戸の浮沈も之れに繋がり、徳川氏の安危も亦た之れに

繋がる、兩雄肩を聳だて、肱を怒らし、口角沫を飛ばし、舌端風を捲きて、滔々堂々、

大に論争し、反駁せしと思ひきや、義邦唯懷中より謝罪の條款を出だして、

「寡君既に大政を奉還す、江戸は即ち皇國の首府にして、幕府の都市にあらざるなり、

然るに皇國の首府に據りて、百萬の生靈を苦しむるが如きは、寡君の斷じて爲さざる所なり、從來幕府の爲せる所、皆天下の爲めに謀りて、徳川の爲めに計れるにあらす、願はくは公平の心を以て、正大の處置を下し玉へ。」

と述べ、且つ「幕臣の飢ゑるも氣の毒なり、これ丈けは御頼み申しぬぞ。」

と言へば、吉之助其條件を一見し、

「委細承知致せり、併し拙者の一存にも計ひ難し、總督府と評議の上、何分の御返答を

申すべし、兎も角も明日の進撃だけは見合はせ申さん。」

と答へて、即時に中村半次郎、村田新八等に進撃中止の令を傳ふ。

兩雄の會見は、斯くして終れり、其間纔かに數分。

義邦頓て辭し歸れば、吉之助自から起つて門外に送り出づ、附近の京兵、ドヤ／＼と馳

せ集まり、二人に對して恭しく捧銃の禮を行ふ、義邦兵士に向ひて、我が胸を指しつ

つ、

「不幸にして談判破裂すれば、或は卿等に突かるゝこともあらん、能く此胸を覺え置か

○兩雄再度の談判

○勝義邦の豪膽

れよ。」

と言ひ捨て立ち去る、市中の物騒言ふばかりなく、何來の銃丸、習々として頭上を過ぐる事數回、義邦

「斯かる中を馬上にて過ぐるは、危険なり。」

と思ひ、急に馬より降りて、馬丁に牽かしめ、自から其後に跟いて、テク〜と歩み歸る。

既にして城門に歸り來れば、大久保越中守忠寛以下の有司、義邦の身上を案じて來り待つ、其顔を見るや否や、皆

「ヤア御無事にて目出たし、シテ談判の模様は如何にぞ。」

と問ふ、義邦

「先づ〜好都合なり。」

とて、其概略を語れば、一同ホツと大息を吐きつと、

「其れにて安心せり、實は先刻城中より四方を觀望せしに、初めは敵兵續々繰り込み來る模様なれば、扱は明日は進撃の積りならんと思ひ居たるに、ツイ今し方より反對に

○幕府有司の大安心の

繰り戻す有様に、這は如何なる仔細ぞと怪み居たる所なり、扱は君の談判にて、西郷の進撃中止の命令を發せし結果ならん。」

と語る、義邦聞きて、吉之助の命令咄嗟の間に、能く行き渡れるに驚く。

三〇七 慶喜の寛典

彼我の談判、談笑の間に終れば、吉之助亦た直に馬を驅つて、駿府に馳せ向ふ。

十六日、駿府に達し、有栖川大總督宮に謁見して、慶喜謝罪の條款を呈し、且つ寛典に處せられんことを請ひ奉つる。

宮直に三軍の總督に令して、進軍を止め、且つ吉之助を京都に遣はして、其由を奏聞せしむ。

當時、在京の薩州人は、何れも慶喜の聰明を忌むこと甚だしく、擬するに大逆無道を以てせんと欲し、百方主張して止まず。

長州藩士木戸準一郎其過嚴に失するを憂ひ、薩長肥阿の諸侯及び有志を圓山に會して、之れを救解せんことを謀る。

○慶喜の滅等

二十日、吉之助の上京せしを機とし、急に公卿、諸侯以下を召して、慶喜の處分を議す、吉之助眞先きに進み出でよ、

「慶喜の罪大なりと雖も、亦た恕すべきの情狀あり、特に死一等を滅せらるゝを當然とす。」

と論ずれば、準一郎極力之れを賛し、終に寛典に處するに決す。是に於て吉之助直に京都を發し、四月三日を以て、江戸に達し、即時に

「明日早旦、勅使西城に臨みて、朝旨を下し給ふべし。」

との旨を幕府に通ず、徳川氏安危存亡の岐かるゝ所、實に此一宵の中に在り。

勅使は先鋒總督橋本少將實梁、副總督柳原中納言前光の二卿にして、既に來りて池上本門寺に在り。

○勅使江戸城に臨む

四日、勅使の二卿、池上を發し、參謀西郷吉之助、海江田武次、木梨精一郎、參謀加勢吉村長兵衛の四人を率ゐて、江戸城に臨む、人心を激せんことを虞れて、一兵をも隨へず。

幕府に於ては田安中納言慶頼及び平岡丹波守、大久保越中守、淺野美作守、川崎備中守、

服部筑前守、織田和泉守の六人をして勅使を接待せしむ。

勅使大手門に到れば、和泉守恭しく門外に出で迎へて先導し、玄關に到れば、越中守出で迎へ、導きて大廣間に抵る。

勅使上段の間に坐すれば、慶頼、丹波守、越中守、美作守、備後守、筑前守、和泉守の七人、二の間に坐す。

勅使橋本少將實梁手づから宣言書を取りて、慶頼に授く、即ち左の如し。

「徳川慶喜天朝を欺罔するの末、終に言ふべからざるの所業に至り、段、深く宸襟を惱まさる、之に依て御親征、海陸諸道進軍の處、悔悟謹慎二念なきの趣聞食され、皇怒を垂れさせらるゝの餘り、別紙の通り仰出され、條、謹で御請け之ある可く、就ては本月十一日を期辰とし、各件處置致すべき様御沙汰の事。」

右期日既に寛宥の御沙汰に以上は、更に歎願哀訴等は、斷然聞食されず、恩威兩立、確乎不拔の叡慮に、速に拜膺、異議ある可からざるもの也。」

第一條 慶喜去十二月以來、天朝を欺き奉り、剩へ兵力を以て、皇都を犯し、錦旗へ發砲し、重罪たるに依り、追討の爲め官軍差向けらるゝの處、段々眞實恭順謹

○朝廷の宣言書

慎の意を表し、謝罪申出に付ては、祖宗以來二百餘年、治國の功業少からず、殊に水戸贈大納言積年勤王の志業淺からず、旁に以て格別深厚の思召在らせられ、左の條件實効相立ての上は、寛典に處せられ、徳川家名立て下され、慶喜死罪一等宥められぬ間、水戸表へ退き謹慎罷在る可き事。

第二條 城明渡し、尾州藩へ相渡す可き事。

第三條 軍艦鐵砲引渡し申す可く、追て相當差返さる可き事。

第四條 城内住居の家臣、御城外へ引退き、謹慎罷在る可き事。

第五條 慶喜叛謀相助けぬ者、重罪たるに依り、嚴科に處せらる可きの處、格別の寛典を以て、死一等宥めらる可くぬ間、相當の處置致し、言上す可きの事。

但萬石以上は、朝裁を以て處置在らせられぬ事。
慶頼恭しく拜受して、元の座に復すれば、勅使、參謀直に下城して、無事に其式を終る。

慶喜の寛典に處せらるゝは、喜ぶべしと雖も、城池の官没に處せらるゝは、麾下の士の痛憤に堪へざるところ、此朝裁の下ると與に、府下の人心、頓に激昂を加ふ。

○海陸軍の嘆願書

就中海陸兩軍の士官は、一所に集合して密議する所あり、議論忽ち沸騰して、形勢頗る不穩に傾く。

慶喜之れを聞きて、大に憂ひ、八日、手書を義邦に賜ひ、京軍の參謀と謀りて、之れを鎮靜せんことを命ず。

其翌九日、白戸百助なるもの海陸軍一同の嘆願書を携へ來り、義邦に呈して、參謀に呈せんことを請ふ、其大意は城池及び軍艦、兵器は尾州藩へ引渡すを改めて、田安家へ引渡すことよし、且つ尾州公子元千代を以て徳川家相續となすの風説を聞きて、之れを不可なりとするに在り、尾州家の行動は、麾下の士の最も不快とするところ、此異議を唱ふるもの、其事情亦た諒とすべきものあり。

義邦乃ち忠寛と與に池上本門寺に到り、武次、精一郎の二人に面會して、嘆願書を呈し、且つ

「朝廷寛大の御主旨は、感泣に堪へざるところなりと雖も、獨り城池を尾張藩へ相渡すべしとの一事は、幕府の首肯する能はざるところ、宜しく軍艦、武器と與に田安家の管理に屬せらるべし、尙ほ私かに承はる所に由れば、朝廷に於ては尾州の公子元千代

○勝義邦參謀官を訪ふ

を以て、徳川家の相續となすべき御内議ありとの事なれども、斯の如きは我等一同の斷じて承服する能はざる所なり。」

と談ずれば、武次

「尾州元千代を以て嗣子となすとの事は、何かの訛傳ならん、我等の聞きも及ばざる所なり、左れども城池を尾州に管理せしむることは、勅命なれば、決して動かすことを得ず。」

と答ふ、義邦

「城池、武器の上納は、其手續甚だ面倒にして、短日月に行ひ得べきことにあらず、此に一策あり、今城中の兵八九千あり、彼等は城池の明渡しと與に、自活の道を失ふものなれば、飢渴の極、如何なる暴舉を爲さんも知るべからず、故に是等の兵は官軍に於て引取る事とせられたく、左すれば武器は是等の歩兵と與に員數を定めて、各屯所に分置し、官舎には小吏を置きて、之れを管理せしむべし、城中には一人の官兵をも入れず、唯三四人の上官のみ入城して、領收の式を行はるべし、我等は田安邸に在りて、職務を處理するが故に、若し不明の事あらば、何時にても御下問に應じて、一々

○城池受授の便法

辯明せん、斯の如きの方法を取らば、城池の授受も、亂民の制壓も、雜作なく行はるべく、眞に一舉兩得の策なり。」

と述べれば、武次

「篤と評議の上、追つて何分の返答に及ぶべし。」

と答ふ、義邦此日は引取り、翌十日、再び訪問せしに、武次出て承諾の旨を答ふ。

此夜、義邦上野の大慈院に到りて、慶喜に調し、具に城池明渡しの順序を述べれば、慶喜愕然として色を變じ、

「其は餘りに粗暴なり、大膽なり、何とて諸官に告げ、市民に達し、兵士を警めて、萬

一に備へざる、騷擾脚下より起らば、滅亡目前に在らん、あゝ我が心衷を貫かずして、

空しく斃れんことの無念さよ。」

と言ひつゝ、血涙潜として雨の如くに下る、義邦見て心胸裂けんとす、頓て

「義邦一たび大事に任ずる上は、上命も請はざる所ありとは、御委任の當時に言上せしところ、君亦た固より然りと仰せ玉へるに由はずや、今日君に言上するものは、唯御胸裏を察し奉つりて、黙止すること能はざるに由るのみ、府民百萬の生死、繫かりて

○慶喜の驚愕

臣の方寸に在り、臣の任重しと雖も、今更何の恐懼する所かはん。と言ひ放つて、立ち去る、主家の存亡、市民の安危、實に一夜の後に迫る、義邦の心緒、今は糸よりも亂る。

三〇八 人心の動搖

江戸の人心は、開城の期日切迫すると共に、俄然として激昂を加へ來れり、慷慨の志士憤然として、

「徳川家何の罪かある、前將軍何の科かある、伏見の戦争は、薩長の暴舉に出づ、我れは武門の習ひ、唯之れに應じたるのみ、然るに牽強し、附會して、之れに朝敵の名を附するもの、畢竟するに薩長の朝憲を弄するに由る、朝命は服すべきも、薩長の矯命は服すべからず、假令前將軍は恭順して、自から責を引かるよも、我等は決して斯かる不法の前に屈服すべきにあらず、今は臣子義に死すべきの秋ぞ、起て、起て、起つて三百年來の鴻恩洪義に報いよ。」と絶叫すれば、同志の徒、切齒扼腕、悲憤の涙を揮うて之に應ず。

○江戸籠城の密計破る

海軍副總裁榎本和泉守武揚、陸軍奉行松平太郎等、最も志士の推重するところとなる、密に

「此上は江戸城に據りて、薩長の暴敵に對抗せん。」

と決して、其策を運らさず、白戸百助早くも之れを上野に報すれば、慶喜

「是れ刃を我が頭に擬すると同然なり。」

と憤り、急に太郎等を召して、盡く其職を褫ふ、密計成るに垂んとして忽ち破る、今

は事復た爲すべからず。

此夜、義邦上野を出て、我家に歸らんとす、諸士の動靜、心に關するを以て、直に單

騎城外を巡見すること一二回。

天明の頃、櫻田門を出て、新し橋に向ふ、會て京兵列伍を正して、續々増上寺の方

より來る、一卒忽ち義邦の轡を按へて誰何す、義邦其氏名を告ぐれば、直に通行を許さ

る、義邦

「扱も奇怪なるかな、我れは官兵の入城せざることを約束せしに、西郷何とて之れに違

へるぞ。」

人心の動搖

と訝かりつゝ、馬を驅りて海軍所に到れば、榎本和泉守武揚以下の士官皆座に在り、悲憤、慷慨、復た制すべからざるの勢あり、義邦一椀の粥を請うて、夜來の疲勞を慰す、時既に午を過く、會々薩州人益滿休之助、馳せ來りて義邦に向ひ、

「我等は西郷參謀の命を承けて來れり、今日は唯五六の上官のみ入城して、城池を受取り、官兵は一人も入城せしめざることを約せしに、昨夜來、府内の形勢俄然として不穩を呈せし模様あり、萬一不測の變を生じて、無謀の戰を開くに至らば、誠に天下の不幸にして、又諸人の大患なり、因つて急に兵を率ゐて、城に入れり、此事前約を破るに似たりと雖も、亦た双方の安全を計るの誠意に出づ、此上は假令不幸にして事變の生ずることありとも、決して累を徳川家に及ぼすことあるべからず、此儀了承せられたし。」

と陳述すれば、義邦其事情を了して、之れを諾す。

三〇九 江戸の開城

江戸開城の日は、愈々來る、四月十一日早曉、參謀西郷吉之助俄かに海江田武次を招き

○水野彦三
郎は尾州藩士

「昨今府下の情勢を偵察するに、人心の激昂、日一日より甚だしきを加ふ、今日城池を受授するに當り、或は意外の暴行を加へんも亦た知るべからず、豫め備ふる所なくんば、悔ゆとも及ぶべからず、我れは兵士に混入し、城下を圍みて、不慮に備へん、足下等は城に入りて、收受の任に當るべし。」

と語れば、武次これに同意し、木梨精一郎、水野彦三郎の二人と與に騎して、江戸城に向ふ、途にて大村藩士渡邊清に逢ふ、武次乃ち之れをも誘ひて行く。

大手門に達すれば、作事奉行竹内大隅守及び大小目付出で迎へ、玄關に到れば、他の吏員出で來りて導く。

最初に座敷向の受授を終り、次で奥向、大奥向并に紅葉山東照宮の殿宇及び累代の靈廟等を受授し、更に表座敷向等の受授を了す。

靜寛院宮及び天璋院の居室には、壁間に三幅對の畫幅を掲げ、床間には香爐或は時辰器を飾り付く、其状見るからに床し。

城中の巡見全く終れば、武次等特に竹内大隅守、堀下野守以下當事の幕吏を靜寛院

宮の居室に招き、

「城池受授の事、是れにて全く終る、各々の勞苦深く謝するに堪へたり、此上は隨意に退城あるべし。」

○諸士の低徊

と告ぐ、大隅守等去らんと欲して去ること能はず、低徊願望して歎歎逡巡すること多し、時、頓て涙を垂れつゝ、見返りく立ち去る。

武次等此光景を見て、同情に堪へず、亦た覺えず顔を掩ふ。

義祖家康の天正十八年八月朔日を以て、始めて此城に入りしより、此に二百七十有九年復た一兵にも舩らず、一砲をも發せずして、之れを京軍の手に委す。

萬里の流も涸るゝことあり、千載の松も枯るゝことあり、徳川の水今や涸れて、松平の幹亦た仆れんとす、參州武士の感愴如何ばかりぞ。

三三〇 慶喜の退去

江戸開城の日は、即ち慶喜出發の日なり。

慶喜上野の大慈院に退きて、謹慎すること六十日、身は蕭條たる六疊の一室に在り、晝

は食も甘からず、夜は夢も安からず。

髪は鬢々として亂れ、髯は蓬々として生ず、顔色は憔悴し、形容は枯槁して、宛がら澤畔行吟の三閭大夫を見るが如し。

今しも水戸に赴かんとする慶喜、肅然として大慈院を出づ。

身には黒木綿の羽織に、白小倉の袴を着け、足には麻裏の草履を穿つ、意氣轉た消沈して、颯爽たる英姿復た見るべからず。

之れに従ふものは、若年寄淺野美作守氏祐等の數士にして、之れを護衛するものは、中條金之助、大草瀧次郎等の精銳隊數十人に過ぎず。

前衛あり、後従あり、旌旗林の如く、貔貅雲の如きの盛時に比すれば、迥然として天地の差、雲泥の別あり。

左しも勇氣勃勃たりし彰義隊の銳士も、此光景を見て、誰れか斷腸の想なからん、皆黙然として涙を呑む。

「水戸の隨行は許されず、切めては郊外の地まで見送り奉つらん。」
隊長以下陸續従ひ來るもの數百人、慶喜揮ひ去らしめんとすれども、更に肯んぜず。

慶喜の退去

○慶喜粗服を着して水戸に向ふ

○壯士涙を
攬つて別る

○大鳥榎本
等の脱走

幕府瓦解史下篇

廳て送りて千住に到り、皆涙を揮うて別る、鬼を拉ぐの勇士も、今は婦女子の狀に異ならず。

國滅びて山河在り、人空うして樓閣存す、諸士の遙かに城郭を望むもの、争でか無限の感慨なからん、少壯血氣の士は、意氣漸く激して、不穩の色を呈はす。

此日、大鳥圭介等は同志を率ゐて、向島報恩寺に會し、更に去つて日光に據らんとす、榎本武揚も亦た風雨に乘じ、軍艦八隻を率ゐて、房州館山に走る。

四圍の乾坤、既に暗慘の色を現はし、江戸の風雲、尙ほ未だ陰鬱の境を脱せず、彰義隊の面々、

「此上は東叡山の座主輪王寺宮を擁し奉つりて、飽までも徳川家の恢復を計らん。」と犇めくもの多く、尙ほも淺草東本願寺と上野寛永寺との二ヶ所に屯集す、其意氣愈々昂奮し、其舉動愈々激越を加へ來る。江戸の形勢、慶喜の去後に至りて、頓に一層の危険を加ふ。

三二一 總督府の進轉

江戸城の授受、全く終るや、直に總督府を城中に置き、東海先鋒總督橋本少將實梁、副總督柳原中納言前光及び參謀海江田武次、木梨精一郎、參謀加勢吉村長兵衛以下皆城中に入り、適宜の居室を占めて、之れに居る。

參謀西郷吉之助のみは獨り城中に入らず、常に城外に在りて、多くの兵士と起居飲食を俱にし、時々之れを率ゐて、市中を巡邏す、參謀局の事務は舉げて、武次に一任して、喙を容れず。

城池及び兵器は、之れを朝廷に收めたりと雖も、軍艦は風雨の爲に未だ受授を終らず。陸城は動かざれとも、海城は能く轉ず。

風雨收まりて後ち、更に軍艦の授受を行はんとせしに、榎本和泉守武揚既に業に之れを率ゐて、房州館山に脱走す。

海軍先鋒總督大原前左衛門督重徳大に驚き、田安中納言慶頼及び勝安房守義邦に對して其背約を責め、先鋒總督橋本少將實梁も亦た田安家の重臣を召して、

「軍艦を引渡すべきことは、勅諭中の一ヶ條にして、田安中納言殿も亦た御請せられしにあらすや、然るに榎本和泉等之れを率ゐて逃走せしこと、無法も亦た甚だし、此上

は中納言殿自身に船を飛ばして、引き戻し來らるべし、然らずんば徳川の家名にも係はり申さんぞ。」

と嚴達すれば、田安家の重臣大に驚きて、急ぎ其由を歸り報ず。

千仞の長堤、此一垓より崩壊し去らんは、一大恨事なり、慶頼幕府の諸有司を招きて、

「此上は如何にもして榎本和泉を引戻すべし、然らずんば徳川家は終に滅亡するの外なし。」

と告げて、速かに引戻さんことを命ず、是に於て田安家の若年寄服部筑前前船を飛ばして、館山に赴き、續いて勝安房守義邦も亦た自から出張して、百方武揚に懇諭すると

ころあり、十七日に至りて、諸艦盡く品川に還り來る。

左れとも武揚の決意頗る堅し、若し盡く引渡さざるを得ずんば、皆艦と共に沈没せんと欲す。

○軍艦の授受

義邦大に憂ひて、具に武次、精一郎等に説く所あり、總督府亦た武揚の願意を酌量し、開陽、回天、蟠龍、千代田の四艦を舊幕府に下附し、富士、翔鶴、觀光、朝陽の四艦を朝廷に收むるに決して、受授の式全く終る。

○榎本武揚再び脱走す

何ぞ圖らん武揚更に八艦を併せ率ゐて、再び逃走し、終に函館に據りて、官軍に抗せんとは、參謀啞然たるもの多時。

三二二 五條の御誓文

東國未だ定まらず、京都に於ては復古の事業、漸く緒に就きて、内治に、外交に、着々其面目を一新せんとす。

○島津忠義とは茂久の事

二月七日、島津修理大夫忠義、細川越中守護久、淺野安藝守茂勳、毛利長門守廣封、松平大藏大輔慶永、山内少將容堂等連署して、一篇の建議書を呈し、大に外國交際の道を盛んにせんことを請ふ。

昨日までは外艦の撃攘を事とし、兵庫の開港を非としたるもの、亦た此中に在り、時勢の進歩か、抑も亦た自家知見の進歩か。

朝廷亦た之れを納れ、二月十七日、各國公使に命ずるに、至急參朝せんことを以てせらる。

各國公使此月晦日を以て參朝せんとし、英國公使パークス眞先に在り、一浪士あり、不

五條の御誓文

○英國公使の危難

意に白刃を揮うて、パークスを斫らんとす。衛卒支へ防ぎて、終に之れを斃す、パークス幸ひに無事なりしも、此日は爲めに参朝を停め、其翌三月朔日を以て、改めて参内謁見を仰せ付けらる、外國との交誼、今や始めて確定を見んとす。

○三岡八郎とは子爵由利公正の事

是に於て主上全國の諸侯を召して、親しく其面前に誓はせ給ふべきに決す、會と諸臣中「此の如きは覇者の爲のみ、天子は諸侯の前に誓約すべきものにあらず。」との異論あり、更に諸侯百官を會して、天地神明に誓はせ給ふに決し、期するに三月十日を以てす。期に至れば、主上親しく紫宸殿に臨御あらせ給ひ、嚴かに天神地祇を祭りて、五事を誓はせ給ふ。

○五ヶ條の御誓文

一、廣く會議を起し、萬機公論に決すべし。

一、上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。
一、文武一途、庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要す。

一、舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。
一、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。
我國未曾有の變革を爲さんとし、朕躬を以て衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯國是を定め、萬民保全の道を立てんとす、衆亦此旨越に基き、協心努力せよ。

御名(御璽)

不なる哉聖誓、萬古の大憲、斯中に在り、千般の治道、亦た此外に出でず、公卿侯伯皆謹みて

勅意宏遠、誠に以て感銘に堪へず、今日の急務、永世の基礎、此他に出づべからず、臣等謹で勅旨を奉戴し、死を誓ひ、黽勉從事、冀くは以て宸襟を安じ奉らん。

慶應四年戊辰三月

總

裁

公 諸 卿 侯

と誓ひ奉つる、主上又朝意の存する所を、普く億兆に知らしめ給はん爲め、特に左の宸翰を下し給ふ。

○御宸翰

朕幼弱を以て、猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て萬國に對立し、列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪へざる也、竊に考ふるに、中葉朝政衰へてより、武家權を專にし、表は朝廷を推尊して、實は敬して是を遠け、億兆の父母として、絶て赤子の情を知ること能はざるやう計りなし、遂に億兆の君たるも唯名のみになり、其が爲に今日朝廷の尊重は、古へに倍せしが如くにて、朝威は倍衰へ、上下相離るゝこと、霄壤の如し、かゝる形勢にて、何を以て天下に君臨せんや、今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事朕自身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立ち、古列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始て天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるべし、往昔列祖萬機を親らし、不臣のものあれば、自ら將として、之れを征し給ひ、朝廷の政、總て簡易にして、此の如く尊重ならざ

るゆゑ、君臣相親しみて、上下相愛し、德澤天下に洽く、國威海外に輝きしなり、然るに近來宇内大に開け、各國四方に相雄飛するの時に當り、獨り我國のみ世界の形勢に疎く、舊習を固守し、一新の效を計からず、朕徒らに九重中に安居して、一日の安を偷み、百年の憂を忘るとときは、遂に各國の凌侮を受け、上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめん事を恐る、故に朕ことに百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を経營し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かんことを欲す、汝億兆舊來の陋習に慣れ、尊重のみを朝廷の事となし、神州の危急を知らず、朕一度び足を舉れば非常に驚き、種々の疑惑を生じ、萬口紛紜として、朕が志をなさよらしむる時は、是朕をして君たる道を失はしむるのみならず、從て列祖の天下を失はしむる也、汝億兆能々朕が志を體認し、相率て私見を去り、公議を採り、朕が業を助て、神州を保全し、列聖の神靈を慰し奉らしめば、生前の幸甚ならん。

右御宸翰之通、廣く天下億兆蒼生を思食させ給ふ深き御仁惠の御趣意に付、末々之者に至る迄、敬承し奉り、心得違無之、國家の爲に精々其分を盡すべき事。

輔總

弼裁

此聖誓の一事ありて、王政復古の鴻業、忽ち燦として光輝を發す。

三三三 上野の戦争 (上)

江戸は開城し、慶喜は北歸せしも、彰義隊は尙ほ上野に據りて解散せず、殺氣陰々として、全山を掩ふ。

頭取澁澤成一郎偶と副頭取天野八郎等と意見を異にし、終に上野を脱して、飯能に走る。彰義隊既に首領を失す、依りて本多邦之輔を推して頭取となせしも、尋で又辭す、乃ち小田井倉太、池田大隅守の二人を推して頭取となし、八郎等之れに副たり、爾かも其實權は八郎の手に在り。

年壯氣銳の徒は、脾肉の嘆に堪へず、或は京軍の士卒を殺傷し、或は京軍の彈藥を奪ふ、其形勢益と險惡を加ふ。勝安房守義邦之れを憂ひて、解散を命ずれとも、聽かず、山岡鐵太郎慶喜の命を以て、

退散を諭せども、又聽かず。

是に於て總督府斷然之れを討伐するに決し、西四辻公業を正使とし、寺島秀之助を副使として、上野に遣はし、輪王寺宮公現法親王に謁して、御退去を促がし奉らんとす、法親王病と稱して拒ませ給ふ。

五月十四日、總督府徳川家に命ずるに、上野に於ける累代の靈位及び寶器を他に移さんことを以てし、其翌十五日を以て、之れを攻撃するに決す。

彰義隊之れを聞きて、防備を設けんと欲し、市民に命じて、上野の周圍に木柵を繞らさしむ。

市民の彰義隊を徳とするもの、争うて役に就く、俠客新門辰五郎自から之れを督し、咄嗟にして工事全く成る。

彰義隊の將士、公現法親王の御身を案じ奉つり、難を奥羽に避けさせ給はんことを請ひ奉つれども、法親王

「我れ何ぞ獨り生きて、徳川の亡滅を見るに忍びんや。」と宣はして、許させ給はず、其儘泰然として本坊に留まらせ給ふ、將士皆感奮せざるは

なし。

既にして十五日は愈々来る。

此日早曉、京軍の江戸城大手門前に集合して、指揮を待つもの三十三藩、其兵合せて一萬六千人に上る、家々の徽章を記せる大旗小旗、林よりも繁し。

總督府の參謀大村益次郎、諸軍の向ふところを定む。

筑前、藝州、薩州の諸兵は、大手の黒門口に向ひ、津、彦根、大垣、長州、伊豫、紀州、及び薩州の別軍は、搦手の谷中口に向ひ、肥後、因州、大村、佐土原の兵は、湯島に屯し、肥前、筑後の兵は富山邸に陣し、尾張、備前の兵は、小石川の水戸邸を固め、阿波及び尾張の別軍は、一橋より水道橋を扼し、紀州の別軍は、淺草通りより吾妻橋を扼せしむ。

部署既に終れば、一聲の號砲と與に、諸軍皆肅々として進む。

彰義隊も亦た部署を定め、防備を設けて、京軍遅しと待ち構ふ。

黒門口の大手は、歩兵、萬字の二隊之れを守り、新黒門、車坂、屏風坂、坂本の諸門は、純忠、精忠、遊撃の三隊之れを守り、穴稻荷門は神木、浩氣の二隊之れを守り、清水門

及び谷中門の搦手は、歩兵、萬字、旭、松石の諸隊之れを守る、其總勢一千人餘り。既にして京軍早や來りて、上野の四方を圍む、梅霖蕭條として降り、戰氣動かんとするところ、山氣更に陰たり。

三三四 上野の戦争 (下)

兩軍の戦端、今や開けんとなす、忽ち二騎あり、黒門口に來る、

「我等は靜寛院宮并に天璋院の御使として來る、此處開かれぬへ。」

と告ぐ、一人は服部筑前守、今一人は一色純一郎なり、頓て池田大隅守に對面し、兩大夫の命を以て、恭順を勸む、大隅守深く厚意を謝し、

「我等は敢て官軍に抗せんとするものにあらず、然かも事志と違ひて、勢此に至る、亦た天なり、命なり、此上は主家墳墓の地の土と化して、三百年來覆育の恩に報い奉つらんのみ。」

と答へ、黯然として涙を吞む、二士亦た其心事を察し、愁然として立ち去る。平和の綱、全く断れて、戦争の幕、愈々開く。

黒門口の先鋒は、筑前兵なり、一呼して柵門を破らんと欲し、吶喊して馳せ進む、其兵一千人。

山兵其れと見るより、忽ち散開して之れを防ぐ。

筑前兵無二無三に進んで、三橋の畔に到り、忽ち敵丸に中りて倒るゝもの十七八人、筑前兵爲めに逡巡して復た進まず。

藝州兵八百餘人、二陣に在り、薩州兵一千餘人、三陣に在り、それと見るより、筑前兵を援けて進み撃つ。

山兵能く戦ふ、京兵松源、雁鍋其他民家の樓上より俯瞰して、之れを狙撃す。

山兵別に其身を掩護するものなく、皆敵前に露出して戦ひ、爲めに丸に中りて斃るゝもの頻々相踵ぐ。

天野八郎戦況を巡視して、此處に來り、此光景を見るより、急に命じて樓上を砲撃せしむ。

一彈屋上に落下して、火災を起し、仲町より延いて山下に及ぶ、京兵大に狼狽して遁がれ去る。

京軍更に新手を以て、進み攻め、銃射、砲撃、頗る力む。

山兵唯一柵を隔てゝ戦ふ、更に疊を持ち來りて、胸壁を設け、之れに據りて、拒ぎ戦ふ、時既に午時に達すれども、復た一憩すること能はず、手づから櫃中の飯を擲んで喫しつ

つ戦ふ、直個彈丸硝藥是膳羞。擲手の先鋒は津藩の兵なり、藤堂伊右衛門兵八百人を率ゐて、谷中口に近づき、暫し大

手の戦況を窺ふ。既にして砲聲殷々として起る、伊右衛門一聲進撃を令すれば、衆鼓噪して進む。

待ち構へたる山兵、銃を發し、砲を放つて防ぎ戦ふ、其勢當るべからず、津兵忽ちにして敗れ退く。

二陣の彦根兵、代つて戦へども、亦た敵せず、動もすれば潰へ走らんとす、大垣兵三陣に在り、盛んに小銃を發し、大砲を放つて、之れを撃つ。

山兵勇を鼓して、奮闘すること數刻、敵は交るゝ來り戦へども、我れは一兵の援なく士卒終に疲れて引き退く。

大垣兵勢ひに乗じ、吶喊して進撃す、山兵の遊軍三百人馳せ來り、斯くと見るより幕地

として其真中に突貫す。

大垣兵不意を撃たれて、團子阪の方に敗走すれば、山兵直に搦手門を復す。

午前の戦は、山兵皆捷つ、京軍尙ほも新手を引き換へく、盛んに攻め立つ。

黒門口の戦鬪、今や益々酣なり、筑前兵先づ突貫し、續いて薩州兵亦た突貫せんとす。

山兵の砲丸、筑前兵の中央に破裂すれば、死者、傷者雜然として生じ、餘兵大に驚きて亂れ立つ。

藝州兵代つて砲戦すること少時、因州、肥後、土佐の諸兵三千餘人、亦た仲町より馳せ來りて之を援け、京軍の勢復た振ふ。

既にして薩州兵又突貫し、因州兵亦た之れに次ぐ、偶々肥後兵の放てる砲丸、因州兵の隊中に破裂し、爲めに死傷するもの若干人、

左れども京軍敢て屈せず、衆を恃んで、益々肉薄す。

黒門口今や既に危し、忽然として一聲の號砲轟き渡ると齊しく、四近の民家に潛める山兵五六十人、不意に突出して、京軍の中に斫り入る、京軍

「素破や裏切りぞ。」

と驚き叫んで、陣中大に亂る、榊原健吉、菅沼三十郎の二人、それと見るより、各と部下を率ゐて、黒門より突出し、猛然として京軍の陣中に斫り入る、其鋒尖最も鋭し。

京軍益々狼狽し火を兩側の民家に放つて、引き退くこと二丁、會々風位北より東南に變じ、火勢熾んに山中に吹き付く、京軍之れに乗じて、風上より砲撃を加ふ。

山兵之れに苦み、又門を開きて突貫し、双方互に死傷あり。

此時に當り、長州、佐土原、名古屋の諸兵、茅町より突進し來る、路狭くして、進退意の如くならず、山内の伏兵、不意に起つて、之れを襲撃し、逃ぐるを逐うて根津の藪下に到る。

備州、柳川等の兵、進んで稻荷門を攻む、神木、浩氣の二隊、此處を守る、苦戦して之れを支ふ。

日既に晡ならんとすれども、京軍未だ其一角をも奪ふこと能はず、大村益次郎等之れを憂ひ、

「若し夜に入るも、之れを攻陥せずんば、處在に潛伏せる麾下の諸兵、或は背後より來り襲はんも知るべからず、宜しく爆彈を投じて、山内を焼き拂ふべし。」
 と決し、湯島天神及び池の端なる榊原、喜連川の兩邸内に砲列を布き、中堂及び山門を目掛けて、熾んに砲撃を行ふ。
 一彈山門の中央に中りて、炎焰俄かに渦巻き騰る、東南の風勢之れを煽りて、猛火更に他の殿堂に及ばんとす。
 京軍之れを望み見て、意氣頓に振ひ、四面齊しく突撃し來る。
 山兵今は支ふべからず、竹中丹後守重固等急ぎ公現法親王の御前に出で、難を奥羽に避けさせ給はんことを勧め奉つれども、法親王首を左右に掉りて肯かせ給はず。
 既にして榊原健吉馳せ來り、法親王の御手を執り奉りて、林光院に移し參らすれば、黒烟忽ち本坊を掩ふ。
 健吉尋で法親王を扶け參らせて、三河島に送り奉つる、法親王是れより御姿を變じて奥羽に落ちさせ給ふ。
 重固等軍使を諸門に馳せて、法親王の御退去を報ず、是に於て將士或は戦死し、或は遁走し、上野終に陥る。
 徳川幕府最後の慘劇、斯くして関る。

三一五 徳川氏の轉封

江戸の亂、既に夷ぐ。
 五月二十一日、朝廷徳川龜之助を駿府に封して、七十萬石を賜ふ、龜之助は田安家より入つて宗家を繼ぎたるもの、今の家達是れなり。
 朝廷曩に徳川氏を封するに百萬石を以てし、以て諸侯の上位に置かんとす、上野の一日に陥りたるが爲めに、忽ち減じて七十萬石となす、之れを舊時に比すれば、十分の一にも過ぎず。
 然れども古川水絶えずして、徳川の流幸ひに涸れざるを得たるもの、洵に朝恩の致す所にして、又祖徳の致す所ならずんばあらず。
 嗚呼、鎌倉以來、政權の武門に歸すること、實に六百七十有二年、此に至りて皇道復た再び興り、妖雲散ずるところ、天日赫として又耀く。

幕府瓦解史 下篇終

大正四年九月十八日印刷
大正四年九月廿一日發行

幕府瓦解史後編

正價金壹圓六拾錢

著者

熊田 葦城

城

發行者

三浦

理

印刷者

平井

登

印刷所

東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

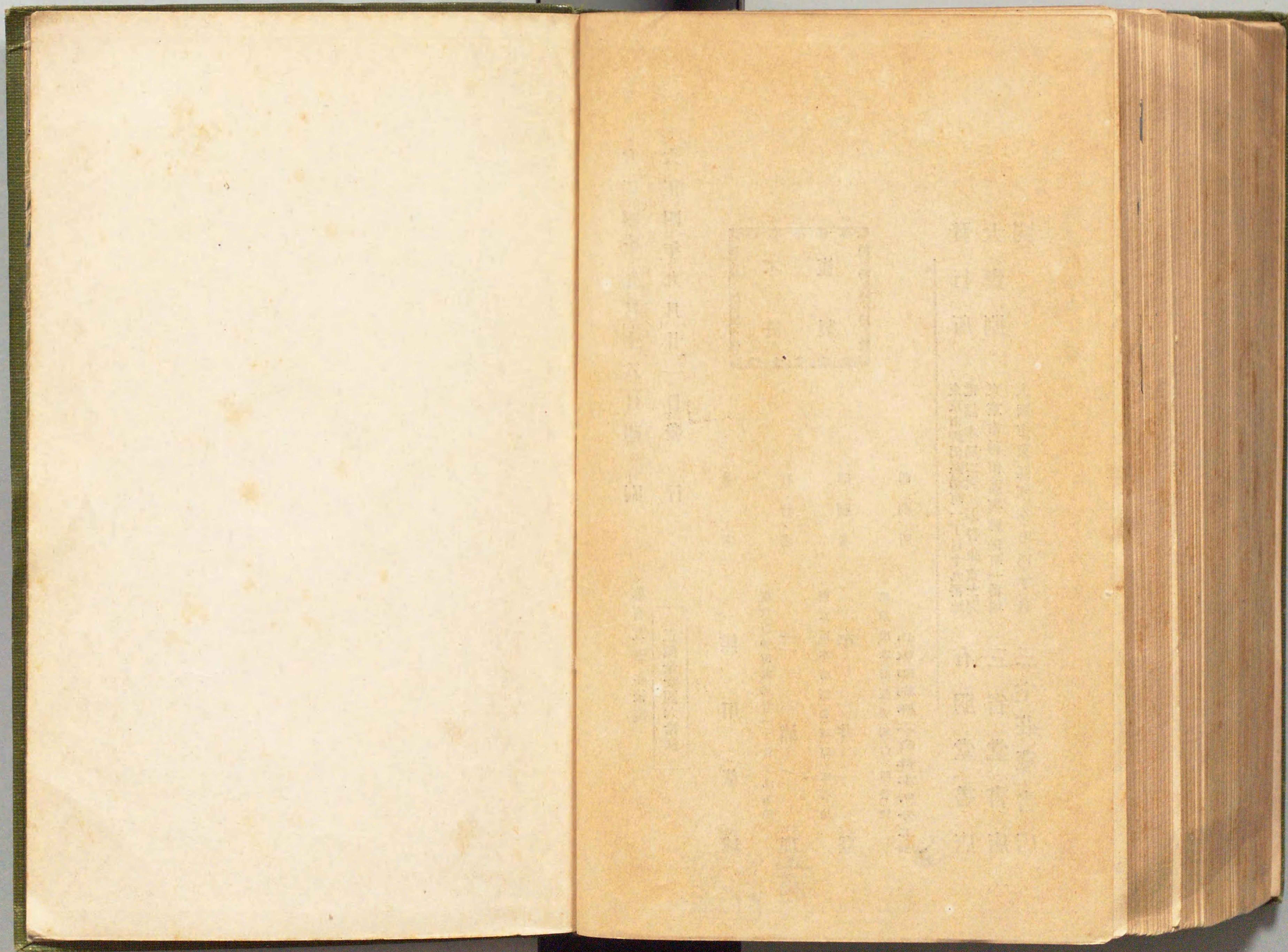


發行所
大賣捌

東京市神田區錦町一丁目十九番地
電話本局二五 振替東京三三
東京市神田區裏神保町一番地
大阪市東區南本町四丁目

有朋堂書店
三省堂書店
三宅莊藏書店





SAN-AISHA SHOTEN

電話神田二九七五番

三愛社書店

